

壬太郎等の一行は、翌日廣島を立つて、又宇品に戻り、同地から神戸行の汽船に乗った。船中では、つれづれのあまりに、葡萄酒、ビール、ブランデー、ベルモット等を飲み合つた。壬太郎は少し量が過ぎた爲めであつたらうか。俄かに急性腸カタルに罹つた。やうやく彼は神戸に上陸し、大森といふ旅館へ着き、便所へ行くと、猛烈な下痢で、その爲め眼がくらみ起ち上る氣力もなかつたほどで、危く卒倒しさうになつた。そして彼は遂に、宿屋で病床に就いてしまつたのであつた。

「弱つたな。コレラかも知れんぞ。いや、コレラに違ひない。」

同行者は病床の壬太郎を見て、非常に狼狽し、同時に又非常な恐怖を感じ出した。そこで彼は、早速、醫者に診察して貰つた。ところが醫者は、疑似コレラと診断した。益々同行者の驚きと騒ぎとは、大きくなり、彼自身の心配も亦大きくなり、その結果は直ぐと、弟の於龜へ電報が飛んだ。

電報を受取つて、意外の出来ごとに肝を冷した於龜は、非常に高大な恩のある

兄のことなので、取るものも取りあへず、神戸へ向け急ぎ東京を立つた。しかし醫者だけに、「萬一の場合に一人では困るから……」と思つて、兄と最も心安くしてゐる仕立屋の秀次をつれて急行した。

於龜は旅館に着くや否や、兄の病氣を診察した。彼は一生懸命であつた。脈をとる手が、いつもになくぶるぶる震へた。診察の結果は、疑似コレラではなく、幸ひ急性腸カタルであることが判明した。

「さすがに醫學士さんだけある。名診察だ。」

愁眉を開いた一同は、こんな輕口を云つて、笑はせる者もあつた。當人は勿論、於龜も、同行者も、旅館の者も、一同救はれたやうに急にはしやいだ。

於龜が枕頭に待して、熱心に醫療に手を盡した甲斐あつて、壬太郎の容體は、日増しに經過が良好で、約一週間ばかりで平癒した。そこで一行は、横須賀造船所さして、歸途に就いたのである。

### 肌身離さぬ五拾圓

その後、壬太郎は再び吳へ出張を命ぜられて、前にやりかけた測量の結末をつけた外、佐世保軍港の造船工場設置、船渠の築造等の手傳を命ぜられた。そんなことから吳及び佐世保へ、彼は出張する機会が多く、その忙しさは席暖まるに暇なしといふ有様であつた。

明治二十一年十月八日のことである。壬太郎は海軍技手見習に擧げられた。そして同年十一月からは、海軍省艦政部勤務となつた。そこで彼は十五年もの永い間、住み馴れた横須賀に別れを告げて、東京へ住居を移した。と云つても、彼のことなので、弟の於龜の家へ同居したまでの話である。

翌明治二十二年二月十一日、目出度く大日本帝國憲法の御發布があつた。この盛典に際して、孝心の深い壬太郎は、永いこと顧みることの出来ないでゐた母

を、郷里から招いて、老ひの身を慰め、孝養を盡した。

明治二十三年二月四日には、彼は海軍技手に任ぜられ、軍務局臨時建築部勤務となつた。しかし判任官になつても壬太郎は、依然として茶葉服を脱がうとしなかつた。依然として横須賀時代と變つたところがなかつた。定めし他人からは奇異に見えたことであらう。

「常田君。君も今迄とは違つて、判任官となつたのであるから、その淺黄の作業服は脱いで、官服を着てくれ給へ。」

或る日上官が彼に云つた。壬太郎は、遂に己むなく多年着馴れた茶葉服を脱ぎ捨て、ここに官服を着用に及んだ。

軍務局に勤務數年、東亞の風雲は急を告げ、遂に日清戦争が勃發するに至つた。

「近江丸といふ商船を、目下武装中である。その艦装に就いて、大至急注意したい件があるから、明日横須賀へ行つて来てくれ給へ。」

或る日、退廳の間際に、時の海軍軍務局第三部長が、壬太郎にかう命令を下した。壬太郎は早速、注意要綱を詳細に聴取し、退廳しようとして、ふと懐中に手をやつて見た。すると横須賀へ往つて歸つて來ても、充分餘るほどの金があつた。國家非常の時である。一刻も早く上官の命令を傳へた方がよい。と考へた彼は、宿へは歸らないでその足で、新橋驛から汽車に乗つて、横須賀へ行つた。そして所長に會つて、軍務局の命を傳へた。そして又その夜の中に東京へ戻り、翌朝登廳して部長にその旨を報告した。

「何？、君はもう行つて來たのか。實に機敏だね。實はこれから旅費を支給し、すぐ行つて貰ふつもりだつたのだ。」

「國家の重大要件ですから、一刻も早くと考へまして、退廳後その足で行つて來ました。」

「うん。よくやつてくれた。立派な心掛けた。禮を言ふよ。」

壬太郎は部長から褒められて、子供のやうに悦んだ。それと共に、この非常時

局であるから、いつ又急用で、俄に出張を命ぜられぬとも限らぬ。その場合もし、旅費が間に合はないで、急用の間を缺くやうなことがあつてはならぬ。これからは日本國中は、何處へでも行けるだけの金は、必ず肌身に着けておかう。…彼はかう考へた。そしてそれ以後といふものは、常に五十圓だけは、肌身につけて放さぬことにしてゐた。

戦争が終つてから、壬太郎は戦役中の功勞によつて、勳八等に叙せられた。

さて、我が海軍に於ては、日清戦争の尊い経験から、海軍大擴張が計劃された。そして吳、佐世保に次いで、舞鶴に鎮守府を新設することになつた。それは明治二十九年六月のことであつた。

「常田君。一つ舞鶴へ行つてくれないかね。」

舞鶴軍港建築部主任の恒川技師が云つた。

「はい。御命令とあれば、何處へでも行きます。」

「それでは、舞鶴軍港新設敷地の測量を、君が主任でやつて貰ひたいのだ。」

「承知いたしました。」

出張命令が下り、旅費が支給された。見ると番號順の揃つた、手の切れるやうな一圓紙幣五十枚があつた。彼は一枚も遣はずに全部を肌身に着けて出發した。

或る日、舞鶴の沖で測量中のことである。一人の人夫のもとへ、親が急病だといふ電報があつたと、係の者が彼に知らせて來た。ところが人夫を使用してゐる親方は、その日、手もとに金の持ち合せがなかつた。壬太郎はこれを聞いて、即座に例の番號順の揃つてゐる一圓紙幣の中から、二十枚を取出して、その人夫の旅費として親方に用立ててやつた。親方から旅費を渡された人夫は、

「これで今夜の汽車に乗れます」と云つて悦んだ。

しかし當時、壬太郎の月給は、僅か三十圓であつた。

### 人夫瀬野彌藏

鐵道はまだ舞鶴までは、敷設されてゐなかつた。だから京都から、人力車に乗つて、園部に一泊し、舞鶴の元田を経て、それから田邊から漁船に乗つて、軍港の豫定地へ上陸したのである。造船工場の建設されることになつてゐたのは、餘部あまのべといふ村であつた。

壬太郎は初め、村長の案内で、海軍用地の境界を調べ、工場、病院、鎮守府、需品庫、射的場、兵器庫、火藥庫等の位地を定め、直ちに測量に着手したのである。

彼の助手として出張を命ぜられた者は、八人で、一行は餘部村の雲門寺の一部を借入れ、そこに臨時海軍建築支部を置いた。

一行が雲門寺へ着いた夕方は、猛烈な雨降りであつた。然も石油がないので、ランプを點けることが出来なかつた。そこで彼等一同は、村の人に頼んで、何とかならぬものかと訊ねて見たが、兎に角一里半も行かないと店がなく、その上この土砂降りではと應ずる者がなかつた。當惑してゐるところへ、蓑笠を着た小男

が、先刻頼まれた買物をして戻つて来た。

「ランプを点けたくも、石油がないので困つてゐるのだ。この雨の中を、大變氣の毒だが、もう一度使ひに行つて来てくれないか。」

その小男は、言斷るかと思ひの外、氣嫌よく承知してくれた。

「は、行つて參りますだ。」

この小男は、瀬野彌藏と稱し、村でも評判の貧乏人で、その長男と共に所謂「歩き」、即ち走り使ひを勤めてゐる者であつた。「これは感心な男だ」と、壬太郎は心の内で思つた。そして彼は翌日から常用人夫として使ふことにした。使つて見ると、實直に働き、土木用の道具類の如きも、毎日きちんと始末をするし、その日の出来事は、夜おそくなつても必ず報告して、翌日に延ばすやうなことは一度もなかつた。

測量で水田の向ふへ、目標を立てる場合でも、他の人夫達は、足を濡らすことを嫌ひ、必ず迂廻するのに、彌藏だけは水田の中を、鴨のやうに眞直ぐに行くか

ら能率があがつた。然も彼は、辛抱強くて、注意力も綿密であつた。読み書きこそ出来ないが、安心して使ふことが出来た。壬太郎はこの彌藏を信用して、何にくれとなく面倒を見てやつた。そんな譯りで、次第に彌藏も蓄財が出来て、大正五年壬太郎が退職した頃には、小さい屋敷ではあるが、二ヶ所も買ひ込み、その一ヶ所に自分の住宅を新築し、他の一ヶ所には、貸長屋を建てて、平和な生活を営むに至つた。

「彌藏は、まことに心掛けのよい男であつた。だから自分は信用して、永い間使つてやつた。今は、幸福な餘生を送つてゐる。矢張り人間は、心掛けが何により第一だ。」

壬太郎は、よくこの話をして、若い者を戒めた。

### 語り草となつた盆踊

餘部村も今では中舞鶴町と名が改まり、繁華な土地になつてゐるが、軍港の出  
來る以前は、四五十戸を數へるほどの貧しい部落に過ぎなかつた。野菜が少な  
く、生魚がなく牛肉は勿論、豆腐も冬にならないと、村では製造する家がない有  
様であつた。附近に吉原といふ漁師町はあつたが、捕つた魚は鹽漬にしたり焼い  
たりして、その夜のうちに、大部分は京都へ送つてしまつた。田邊などには、魚  
の干物や固くなつた蒲鉾位はあつたが、この邊の百姓家で、平常酒の肴(つまり)  
にするのは、所謂る煮干(餘部ではジャコと云つてゐた)で、これに醬油をかけ  
て用ゐてゐた。

米は澤山收穫があつたが、村の者は、これさへも大部分は賣つて、麥を買つて  
食用とし、その上又薩摩芋を米の代用食としてゐた。

人夫達をつれて、山へ仕事に行くと、人夫達はいつも、鎌、鉈、鋸の類を、路  
傍に置き放しにして歸るので、壬太郎は怒つて注意した。すると彼等は、「どう  
せ明日も又入用な道具だし、この土地では、人の物を盜むのは、烏が辨當箱を狙

ふだけです。」と答へた。それほど純朴な土地であつたから、人夫賃の如きも、  
普通二十錢、特に力量の優れた者で、やうやく二十二錢位であつた。

この餘部村では、こんな話もあつた。

壬太郎等の一行が、この土地に着いた翌日が、丁度お盆であつた。雲門寺の庭  
では毎年、村の男女が、盛大に盆踊を開くのが例であつた。

「今年はつまらないね。海軍省とやらのお役人様が來てゐるから、お盆でも遠慮  
で踊ることが出来ないよ。」

村の若者達が、こそこそ囁き合つてゐる聲が、ふと壬太郎の耳に入つた。娛樂  
機關に恵まれない村人達にとつて、盆踊は年に一度の最大の慰安であつた。それ  
が役人への遠慮の爲めに出來ぬとあつては、土地の人々の失望のほどが思ひやら  
れた。それで壬太郎は、早速若者達に云つた。

「この村の盆踊は、大變面白いうではないか。俺達も見たいものだ。みんな來  
て、踊つてくれないか。俺達も一緒に踊るよ。」

間もなく五六人集つて來たが、海軍省のお役人様が見てゐるといふので、どうも尻込みして、進んで踊らうといふ者が出ない。そこで壬太郎は、子供達に菓子と菓子を與へ「さあ、みんなして踊つてくれ」と促したところ、子供達だけは輪を描いて踊り出したが、若者達は矢張り躊躇してゐる。

「この村に、酒を賣つてゐる家があるか。」

「は、あります。」

「それでは、一杯おごるから、誰か二三升ばかり買つて來てくれないか。」

壬太郎が金を渡すと、若者の一人が駆け出した。そして間もなく、酒樽をさげて意氣揚々と戻つて來た。

「御苦労々々々。今度は酒の肴だが、何がよからう。」

「ジャコ（煮干）に、醬油かけて結構です。」

やがて酒の廻つた若者達は、「さあ俺達も踊らうぜ」と、子供達の輪と一緒になつて、盛に踊り出した。そのうちに又誰れかが、音頭取の老人を引張つて來たの

で、この老人にも酒をすすめて、音頭を取らせることになつた。七十餘歳だが、村一番の聲自慢で、盛に唄つた。その聲につれて、踊の輪は一層大きくなつて行つた。壬太郎は更に酒を追加した。やがて本堂の縁は、見物人で埋り、庭は踊り子で埋まるといふ有様で、腰の曲つた爺さん婆さん達までが加はつて、夜の更けるのも知らずに踊つた。

翌日、村の人達は話してゐた。

「昨晩は、近所の七ヶ村から、踊り子が集まつて來ました。その爲め外の村では、踊りが出來なかつたさうです。」

又「明治二十九年の時のやうな、あんな盛大な盆踊は、前にも後にも見られなかつた」と、土地の古老は後々までも、これを語り草にしたさうである。

もう一つ壬太郎の當時の話をすると、雲門寺は禪宗の名刺で、住職は學識もある高僧であつた。

壬太郎は、人間は如何ほど年齢を重ねても、精神の修養を怠つては駄目だと考

へた。殊に自分は、父母の膝下を離れ、こんな異境で暮してゐるのだから、一層精神の修養が大切だ。幸ひ禪宗の寺に日夜起臥してゐるのだから、住職に就いて参禪してみよう。かう思つたので壬太郎は、和尚のゐる隠寮に赴き、和尚に申し出た。

「和尚さん。私はあなたのお弟子にさせていただいて、参禪して見たいと思ひます御指導願はれないでせうか。」

すると和尚は、彼に反問した。

「それでは、あなたにお伺ひしますが、政府の役人として、あなたは、現在どんな覺悟を、お持ちになつて居られますか。」

「さうです。私は國家の爲めに、一身をささげ、又一家の爲め犠牲になつて働く覺悟を持つてゐます。これは現在も將來も、決して變ることは斷じてありません。」

「なるほど。常にその覺悟で、油斷なく勤めるならば、敢へて参禪の必要はあり

ません。」

和尚はかう云つて、微笑を洩した。

壬太郎は、そこで強ひて参禪を願はなかつたけれども、和尚の言葉は、千萬言の説教よりも嬉しかった。

### 「赤帽さん」「赤帽技師」

明治二十九年の九月までに、命令通り測量が終つたので、壬太郎は、一先づ舞鶴を引上げて、海軍省軍務局へ戻つた。そして翌三十年の春からは、いよいよ軍港が起工されることになつた。壬太郎は、今度は土木の工事監督として、再び舞鶴へ派遣された。

彼の監督下に、第一號工事は竣工し、引續いて第二號工事が開始された。この工事は、二十萬立方餘坪の土を運搬して、海面の埋立をするのであつた。が、そ



の運搬の途中には、帯をひろげたやうに低い山が、細長く横たはつてゐたから、どうしてもそれを遠く迂回しなければならなかつた。しかし迂回してゐては、時間がかかつて豫定の期日内では、竣工が覺束なかつた。大いに憂慮した壬太郎は、山へ登つて諸所を見分して歩いた。その結果、小山に約一千尺程の隧道を抜けば、迂回するよりも約五分の一に距離を短縮出来るばかりでなく、掘り出した土を埋立に利用することが出来、従つて工事がはかどり、工費の節約にもなることを考へた。彼はこの案を、設計者たる技師に進言した。然しそれは不幸採用されなかつた。

工事の入札に先立つて、請負希望者に實地見分が許された。

請負人達は、山を迂回して土を運搬するより外に手段はない。然し、その方法では、豫定の期日内に仕上げることは不可能だ、といふ意見に一致して、誰も彼も皆な歸つてしまつた。そこへ吉田虎松といふ請負人が、遅れ馳せにやつて來た。

「今頃どうしたのだ。皆な歸つて行つたよ。」

壬太郎が云つた。

「どうしても都合がつかず、つひ遅くなつて済みませんでした。」

「設計の方の技師も、もう歸つてしまつたから、それでは僕が案内してやらう。」

「實は、下見はして來たのです。この工事は、豫定の期日迄には、誰にも出来る見込みが立ちません。もともと設計に無理があります。」

他の請負人と同じことを彼は云つた。

そこで壬太郎は、隧道を掘れば大丈夫だといふ自分の案を説明した。

「そんな箇所があれば、お説の通り豫定の期日迄に仕上げる事が出来るかも知れません。その場所を見たいものですが、御案内願はれませうか。」

相手の顔色が、如何にも眞剣なので、壬太郎は大いに力を得て、晝食後に彼を案内して山へ登り、隧道を抜くべき箇所を説明した。

「なるほど、これなら仕事になります。大變によい都合の處を教へていただいて

有難うございました。」

かうして、この工事は、遂に壬太郎の案によるより外ないことが判り、吉田組に請負はせることに決定した。設計の一部が變更されると、先づ隧道の開鑿工事から着手することになった。

舞鶴軍港の敷地は、今程ではないにしても、廣大なものであつた。壬太郎は、その土木工事の全部を、監督せねばならぬので、頗る多忙であつた。山にゐたかと思へば、もう海へ行つてゐると云つた具合で、あちこち飛び廻つて歩くので、常に彼の所在は明かでなかつた。それで一番困るのは、使丁であつた。急用があつて、壬太郎を見付けやうと思つて探しても、何處にゐるのか判らない。「俺ア、常田さんを探して歩くのが一番厄介だ。」使丁は愚痴をこぼした。

このことを耳にした壬太郎は、何かよい方法はないものかと、一晚中考へた。明治十年の鹿兒島戦争の際に、近衛歩兵は赤い帽子を冠つてゐたので、それを目標にされて困つたといふ。さうだ、赤い帽子を冠らう。それがよい。赤い帽子な

らば、どんなに遠くからでも一と目で直ぐ判る。

寢床から跳び起きた壬太郎は、自分が用ゐてゐたフランネルの赤い腹巻を裁ち、怪しげな鳥打帽子に似たものをつくり上げた。この腹巻は、弟の於龜が曾つて、「赤い物は、人體に藥であるから、肌身につけてゐる方がよい」と云つたので、その説に従つて日頃用ゐてゐたものである。

翌朝、手製の赤い鳥打帽子を冠つて、事務室に現はれた壬太郎は、使丁に云つた。

「今日からは、この赤帽を冠つてゐるから、これを目當てに探してくれ。すぐ判ると思ふ。」

夕方、事務所へ歸つて來ると、今度は使丁が云つた。

「お蔭さんで大助りです。海岸の分れ道で、赤い帽子の人を、見かけなかつたかと訊ねたら、この先で逢つたと答へました。そこで其の方向へ行くと、今山へ登つたといふ。山の近くへ行つたら、向ふの方に赤い帽子が見えましたので、しめ

たツと思ひました。あつ、は、は。」

壬太郎はそれ以來、退職するまで、この赤帽を離さなかつた。そこで誰いふとなく「赤帽さん」、又は「赤帽技師」の愛稱で呼ばれるやうになつた。但し夏だけは、烏打帽子では日除にならず、暑さが防げぬので、百姓用の笥笠を冠り、その代り手縫ひの赤いチョッキを着て目標にした。

### 隧道の開通

吉田虎松の請負つた第二號工事は、明治三十年四月から、先づ隧道の開鑿に着手した。この開鑿は、山の兩側から晝夜兼行で始められたから、壬太郎は晝夜二回づつは見廻つて、監督せねばならなかつた。責任感の強い彼は、形式的な巡回になつてはならぬと考へ、時間を定めて巡回したのでは、その時間を見計つて誤魔化し仕事をされても、それを見極めることが出来ないから、時間を定めず隨時

に見廻ることにした。それから巡回の數も、時によつて三回も四回もといふ風に、骨身を惜しまなかつたから、工事に従事してゐる者の方では、少しの油斷もならなかつた。

山の高さは凡そ二百尺ばかりあつた。山を越さずに麓を迂回すると、一里近くも歩かねばならぬので、彼は眞夜中でも山越しをして、兩側の工事を巡視した。雨の日などは、赤粘土は迂り易くて、轉ぶことも度々であつた。冬は雪が、二尺も三尺も積ることがあつた。こんな日は、山を越す者は一人もなかつたが、彼はあら雪を踏み分け、道なき道を辿るのであつた。道を踏み誤つて、數十尺の崖下へ墜落したり、土砂が崩壊してあつと思ふまもなく埋没され、九死に一生を得たこともあつた。

見廻る者と掘る者と、この兩者の間に、強い協力があつてこそ能率はあがる。現場監督としての壬太郎には、元來爪の垢ほどの私心もなかつたから、その熱誠は、總ての働く人達の胸を打つた。汗と泥との忍苦の努力は、豫定通り遂に山を

貫くことが出来た。

明治三十一年の夏のことであつた。

「監督さん。只今、隧道が貫通しました。」

坑夫の一人が、うれしさのあまり彼のところへ駆けて来て報告した。

「貫通したか。意外に早かつたな。」

壬太郎もうれしかつた。隧道深く足を運んで行つた。見ると烏羽玉の闇であるべき坑内に、ばつと奥深く一條の明るい光線がさしてゐた。

「うん。貫通したな。」

壬太郎は、一種云ひやうのない快味を覺えた。

「監督さん。これまで随分と隧道も掘つて見ましたが、こんなに早く少しの喰違ひもなしに、うまく貫通したのはありませんよ。」

坑夫長は、かう云つて悦んだ。壬太郎は悦びのあまりに、一圓紙幣を何枚か掴み出して云つた。

「芽出度い。少ないが、これで一杯祝つてくれ。」

翌日の夕方、坑夫長が壬太郎の寓居を訪ねて、禮を述べた。

「昨日はお酒手を下さつて、みんな大悦びでした。お禮を申上げに参りました。」

「いや、あんまり少額でお禮を云はれるほどでもない。恐縮だ。」

「飛んでもないこと。何よりもお志が嬉しいのです。私共は多年土木工事をやつてますが、こちらから監督さんに、お祝酒を差上げた例は澤山ありますが、監督さんからお酒手を下さつたのは、今度が初めてです。坑夫達の悦びは、一通りではありません。今後は一層よく働いてくれることと思つてゐます。」

この隧道開通によつて、六十ポンドの軌道を敷き、汽罐車をつけて土砂を運搬することが出来た。然も一里近くも迂回せねばならぬ長距離が、僅に一千尺に短縮されたので、請負費も、二十五六萬圓かかる所を、二十萬圓で済んだ。

## 船大工富士甚兵衛

築港工事の方も、他の諸工事と並行して進められた。やがて石材も入用なので、あらかじめそれを運搬する船の用意をしておかねばならなかった。そこで船を新造する計画を立てると共に、船大工を詮索して見た。が、舞鶴地方には、信用して請負はせるに足る人物はなかった。由良川の川尻には、しつかりした船大工がゐると聞いたので、調査に行つたが、矢張り思はしくなかった。己むなく若狭の小濱まで、探しに行つたところ、同所に富士甚兵衛といふ船大工の居ることが判つた。その家は、元祿時代から引續いて、船を造つて來たといふ舊家であつた。それならば信用出来るであらうと考へ、その甚兵衛を訪ねた。

「わしのところでは、代々船大工を家業にしてをります。明治以前は、大阪、加賀、能登の方面からも、千石積の船の注文を受けて、盛に造りましたが、西洋型

の船が出來始めてから、注文も少くなり、今では家業も下向きの一方です。」

甚兵衛は、正直に告白した。

壬太郎は、この男なら性質も良ささうだし、腕もありさうだと見込み、仕事を請負はせることにした。然し役所の仕事であるから、當時の慣例として競争入札の方法をとらねばならぬので、五大力船二艘建造の請負入札の公告をした。だが、外には入札者がなかつたので、甚兵衛が請負ふことになつて、そこで請書を出させて、契約する段取となり、規定によつて保證金の納入を命じた。

「保證金があるんですか。わしは今迄、注文を受けると、注文主から手附金を貰つて仕事をして來ました。それなのに、こちらから保證金を出せとは、筋道が違ひます。そんな馬鹿げたお話なら、まあ、御免を蒙ります。」

甚兵衛は、昔氣質から立腹してしまつた。

「かう話が喰違つては困るが、役所の仕事は民間と違つて、皆な保證金を、納めて貰ふことになつてゐるのだよ。そこを聞き分けて納めて貰ひたい。それでない

と、折角だが請負はせるといふ譯けには行かぬのでね。」

壬太郎は噛んで含めるやうに、當時の官廳の請負制度に就いて、説明してきかせた。

「でも、それとは知らずに見積りして出したのですから困ります。實は保證金を納めるとなると、その利子だけ、損のゆく勘定です。」

「なるほど、お前は正直だ。それならば理屈が通つてゐる。ではその利子だけ、請負の金高を増すことにしよう。」

「それならば納入します。」

そんな譯けで、話が纏まり、壬太郎の監督の下に建造することになった。それ以後は、金高の少ない小船は、大概この甚兵衛に造らせた。

その後、泥を運ぶ船を、六艘造ることになり、三萬七千百圓の豫算で、請負に出したことがある。この時は、金高が多かつたので、呉からも一人請負人がやつて來た。壬太郎は、請負人の談合を避けさせる爲めに注意した。

「他所から請負人が來ても、談合など不正入札してくれるな。それでは競争入札の趣旨に反するからな。」

「承知しました。決してそんな不正入札は致しませんから、御安心を願ひます。」  
甚兵衛は、快く誓つた。そして彼は、今度の仕事ばかりは、男の見せどころだと云つて、壬太郎の見積り豫算よりは、二百圓安く入札した。その結果、總額三萬六千九百圓で、甚兵衛の手に落札した。

ところがその日、甚兵衛が、残念さうに壬太郎に云つた。

「今日は實に馬鹿を見ましたよ。もし落札せぬと思ひましたから、豫算額より二百圓引いて入札しましたところ、呉の人との開きが、七千圓もあるではありませんか。二百圓は、ただ捨てたも同様です。」

「競争入札の妙味は、其處にあるのだよ。」

壬太郎は、かう云つて笑つた。

この船は、全部松材の赤味ばかりで造つた。船底には扉があつて、それを鎖で

釣つておき、上から泥を積込んで沖へ出し、鎖を放すと泥の重みで底の扉が開き、泥が落ちる仕掛けになつてゐた。

當時、まだ舞鶴の工廠内では、船が造れぬので、皆な若狭の小濱の船大工、甚兵衛のもとで造つた。その数は、全部で二十艘に及んだ。

初め壬太郎が、小濱へ行つた時、甚兵衛は同地一流の料理屋へ案内して、歡待これ努めた上で、今後は何かと便宜を與へてくれと云つた。

「今晚は折角のおもてなしだから、快く御馳走になるが、ちよつと申しておきたいのは、固いことを云ふやうだが、特別に君の利益になるやうな監督振りは、私には出来ない。私は請負人が、ぼろい儲けをしたと、羨まれるやうな利益は得させない代りに、損をさせるやうな仕事もさせない。これはよく承知しておいて貰ひたい。だから今後はどんな場合でも、絶対に御馳走にはならぬから、その心得でゐてほしい。」

壬太郎らしい云ひ渡し方であつた。

甚兵衛の家は廣かつたので、壬太郎はその一室を借り受けて、造船の指揮監督に當つた。初めの約束では、米は自分が買ひ、副食物も用意するからと云つて、飯だけ炊いて貰ふ筈であつた。ところが夕食時になると、酒の肴に思ひもかけぬ珍味が運ばれて來るので、彼は困つて云つた。

「こんなことをされては、甚だ迷惑である。酒の肴は、どうも自分で好きなものを見立てて料理した方がよいから、今後は決して心配して下さるな」それ以後壬太郎は、自分で魚市場や八百屋へ行き、好む品を仕入れて歸り、それを料理して舌鼓を打つた。それで甚兵衛方でもあきらめて、御馳走を出すのを止めたので壬太郎はほつとした。

壬太郎は、あまり多くは飲めぬ口であつたが、どちらかと云へば酒は好きな方であつた。それで甚兵衛の父親を招いては、晩酌をやるのが楽しみの一つであつた。

或る晩、甚兵衛の父親は、當惑さうに云つた。

「かう御馳走にばかりなつてゐては、どうも心苦しくて、うまい酒も、咽喉へつかへさうです。」

「それぢや仕方がない。楽しみに飲む酒が苦くなつてはね。御馳走するのはやめることにする。あなたの飲む酒だけは、お持ちになつて下さい。」

老人はかう云はれて反つて大悦びで、それからは毎晩、自分の飲み料だけの酒を、徳利に入れて持つて來た。そして二人で、世間話などしながら楽しんだ。壬太郎の、こだはりのない性格の一面が見られる。

#### 自費を投じて舟を購入

明治三十年二月から、軍港附近の海底の深淺を、測量することになつた。その爲め壬太郎は、幅四尺、長さ二間位の小舟を、貸舟業者から借入れた。ところが一日十錢の損料をとられた。當時は十圓も出せば、その程度の舟の購入が出來た

から、「ちと損料が高すぎる。いくら政府で支拂ふからといつても、不當の金を拂はせては、國家に對して相濟まない」と壬太郎は思つた。

丁度その頃好都合にも、舟の賣物の出たことを耳にした。壬太郎は自費八圓五十錢を奮發して、その舟を購入し、損料なしで、ひそかにこれを公用に使用した。この事を知つた上官が或る日、彼に云つた。

「常田君。聞くところによると、君は自費を投じて舟を購入し、損料もとらずに使つてゐるさうではないか。何故、借りて使はぬのかね。」

「初めには、借りて使ひましたが、何分にも損料が不當に高いのです。不當な金を拂つては、國家に對して相濟まぬと思ひましたから、自費で船を購入し、それを使つてゐる次第です。」

「それは、立派な考へであるが、君がそんな犠牲を拂はんでもよいではないか。それよりも今後は土地の者に、その船を買はせ、君が適當と思ふ損料で借りてはどうかね。」



「それでは、さういふことに致します。」

壬太郎は自分の家主、作右衛門に向つて云つた、

「折角船を買つたが、上官の意見に従つて、賣却したいと思ふ。一つ君が、この船を引受けて、役所へ貸してくれないか。損料は一日五錢づつ拂ふことにする。」  
「それは、耳よりの話です。八圓五十錢の資本で、損料が月に一圓五十錢、年に積れば十八圓、それでは二十割強の利子になる勘定です。さう願はれば、棚から牡丹餅です。」

話は簡単に片付いた。作右衛門も悦べば、國家も冗費が省け、結局は兩得といふ譯けであつた。

### 伊東元帥を欺る

「嘘は泥棒の始りと諺にいふが、私は嘘をいふ者は大嫌ひだ。そんな者は相手に

せぬ。」

壬太郎は常に、かう云つては、書生達を戒めた。然るに、その壬太郎が、人もあらうに伊東元帥を欺いたといふのであるから、これは一世一代の珍事と云はねばならぬ。

舞鶴鎮守府管内に、淨水道を敷設すべく、壬太郎は水源地を詮索し、やうやく適當の場所を探しあてた。そこで海軍省の認可を得て、一日も早く着工したいと思つたが、折角本省から視察の役人が來ても、距離の遠いことと場所の不便の爲めに、未だに親しく水源地を踏査した者がなく、その爲め許可が遷延して決定を見ないでゐた。

たまたま伊東元帥が、舞鶴を訪れた。壬太郎は、これ幸ひと、この機會に水源地を視察していただかうと、元帥のお側の人にまで願ひ出た。幸ひ元帥は快諾された。悦んだ壬太郎は、自ら案内役を承つて出發した。  
「なかなか遠いな。まだ餘程あるらしいのう。」

元帥は山道に立ちどまつて訊ねられた。

「まだ五六丁位はございませうかな。もう程なく着きます。」

壬太郎は何氣なく答へた。

しかし更に七八丁も歩いたが、まだ到着する氣色がなかつた。

「あれから大分歩いたやうぢやのう。」

「いや、もう直ぐでございませう。山道でございませうから、お疲れでございませう。」

「別に疲れはせんが、相當遠いのう。」

「恐縮でございませう。」

こんな問答が幾度か繰り返されて、やうやくのこと目的地へ着いた。そして首尾よく元帥の視察が終つたので、その夜は、郡長の主催で、元帥の慰勞かたがた歓迎の宴が開かれた。壬太郎も陪席の光榮に浴した。

その席上、元帥が云はれた。

「常田君。今日の五六丁には、我輩も閉口したぞ。だが、これには何か仔細があるのぢやらう。」

壬太郎は大いに恐縮して答へた。

「閣下。實は今迄にも、本省から當軍港の諸工事視察の爲め來られた方が、二三ございましたが、あまりに距離が遠くて、然も道が悪うございますので、遠望しただけで皆なお歸りになりました。その爲め許可が手間取れまして、今日未だに着手に到らないのでございます。もし今日、閣下の御視察を仰ぎ得ませんでしたならば、水源地は、いつ認可の指命に接することが出来るか判りませぬ。それで、悪いこととは存じながら、甚だ遠距離のところを、御案内申上げた次第でございました。まことに申譯がございません。改めて御詫びを申し上げます。」

壬太郎は、ありのままを答へするほかなかつた。

「あ、さうであつたか。多分そんなことぢやらうとは思つた。」と元帥はお怒りもなかつた。「我が海軍には、君のやうな人がゐてくれるから安心ぢや。」

## 棕櫚の植林に失敗

壬太郎は明治三十年から、舞鶴鎮守府の開かれるまで、滿五ケ年間、月に一度は、必ず小濱へ出張を命ぜられた。小濱へ行く途中には、棕櫚の木が多く、どんな屋敷にでも、五本や十本は植ゑてあつて、その發育もよく美事であつた。

これより先、明治二十九年に、初めて壬太郎が舞鶴へ出張を命ぜられ、九月に一先づ東京へ歸るべく、須知山峠を通つた時のことであつた。大原の附近で、山一面に棕櫚の木の繁茂してゐる風景を眺めたことがあつた。彼は後に、ふと其の時のことを思ひ出して、舞鶴軍港内の新規に築いた堤に、棕櫚を植ゑたなら、風致を添へるばかりでなく、將來港務所で、船を繋ぐ綱を作るにも、その材料として好都合であらうと考へた。一本の棕櫚の木から、一ケ年に約十二枚の皮がとれるとの話も聞いてゐた。假りにその半分の五枚としても、當時の値段では、一枚

が一錢五厘であつたから、堤の面積から割出して、約三十萬本は植ゑることが出来る。すると二萬二千五百圓の収益を上げ得る勘定である。これこそ一舉兩得である、壬太郎は考へたのである。

そこで彼は、百姓家から棕櫚の實を貰ひ集めて、舞鶴海兵團の周圍、鎮守府、海軍病院、射的場等の堤々に悉く植ゑる計畫を立てた。そして自分の家主作右衛門老人が、ぶらぶら遊んでゐるので、彼の好物の酒を、毎日五合づつ自費で買つてやる約束をして、蒔付けをさせた。最初の年には、海兵團の堤に、十萬餘粒の種を蒔付けた。秋に蒔いてもよいと聞いたので、その通りにした。然るに翌春になつても、芽を出す氣配がない。心配になつて來たので、壬太郎は棕櫚の木を栽培してゐる家へ訊ねに行つた。すると、梅雨過ぎた頃でないと、發芽しないと教へてくれた。

梅雨の過ぎるのを待つてゐると、果して棕櫚は發芽して來た。間もなく三寸位になつた。彼はこれに力を得たので、更に二十萬粒の種を蒔付けた。首尾よくこ

れも發芽した。その頃には、最初に蒔付けた方は、一ッ葉から三ッ葉に成長してゐたので、壬太郎は大いに悦んだ。そして、尙ほも残りの堤へ、種を蒔付けて、その成長を待った。ところが何ぞ圖らん、初年に蒔付けた方が、どうした加減か、先に出た葉から次第に枯れ出して、終には幹までも枯れさうになつた。害虫の仕業ではないかと、苗木の養成を營業としてゐる者に訊ねて見た。

「いや、それは害虫の仕業ではありません。第一棕櫚は蒔付けではうまく育たないものです。だから苗木から仕立てて行くに限るのです。苗木を仕立てるには、良い畑に肥料を充分に施して、種を蒔き、三年目になつたら、他の畑へ移植して、それから掌のやうな形の葉が出たところを見て、目的の地へ移さぬと、根付かぬものです。」

壬太郎の生涯中で、何か失敗談といへば、先づ、このやうな棕櫚の植林位のものであつた。なるほどな。初めから苗木を養成してゐる人に聞くべきであつた。少しの不注意から、折角の努力も徒勞に終つた。然し實によい教訓を得た。

これに要した金などは、授業料を拂つたと思へば安いものだ。壬太郎は、こんな風に考へて朗かに笑つた。

その後も私財を投じて、鎮守府門外の通路その他に、今度は多くの櫻樹を植付け、更にモクレン、ユブシ等も植ゑた。それらの樹木は成長し、現存してゐるものもある。

### 海軍技師に昇進

明治三十四年十月に、舞鶴鎮守府が開かれると共に、壬太郎はそのまま同鎮守府工廠付の造船技手として、勤務を命ぜられた。

越えて明治三十七八年の日露戦役の功により、青色桐葉章及び金二百五十圓下賜の光榮に浴した。同三十九年七月九日には、高等官七等の海軍技師に任ぜられ、大正二年三月三十一日には、更に高等官五等に昇進、同年五月三十日付を以

て、從六位に叙せられた。それは六十二歳の時であつた。同年夏、發行の大阪毎日新聞紙上に、「赤帽さん」と題する記事が載つたことがあつた。ここに世人は、初めて隠れたる常田壬太郎なる人物の一面を知つたのである。

その記事には、當時の彼の生活振りが、如實に記されてゐる。その一節を左に紹介することにする。

舞鶴鎮守府の開廳と共に、同地方人の今も尙忘れることの出来ない名物男がある。土地の人は、呼んで赤帽さん又は赤帽技師といふ。赤帽と云つても、白銅一箇で荷物を運ぶステーションの赤帽とは違ふ。これは歴然とした官職にある人で、赤帽さんは同地方の人々の、勝手につけた綽名である。先づ肩書氏名から御披露に及べば

舞鶴鎮守府海軍工廠員（高等官五等）

從六位勳六等海軍技師 常田 壬太郎

記者は此土地へ来て、常田さんの御宅はと訊いたら、土地の人は、皆怪訝な顔をして首を傾けた。依つて赤帽さんの御宅はと訊き直したら、女童までも知つてゐた。この節なら夕方六時頃から夜にかけて、餘部の町を歩くと、眞赤な綿ネルの烏打帽を被つた所謂赤帽さんを見かけることが出来る。牛肉の竹皮包や、葱束などをさげて歩いてゐることなどは、通常の茶飯事で、土地の人は珍しいとも、何んとも思つてゐない。時としては金筋を卷いた左腕に、大根の束を抱へ、右手に鍋をぶらさげて歸宅することなどもある。住居は、餘部町本町一丁目の小路を、左に入つたところで、蒲鉾板のやうな標札に、「とさだ」と記してある。屋根は瓦葺だが、粗末な平屋建で、大阪市中の裏長屋よりも遙かに劣つてゐる。これが年俸二千圓近くも頂戴してゐる高等官の御住居とばさても。記者が訪ねた時、常田さんは工廠へ出かけて不在で、戸が締つてゐた。向側から大工の女房さんが飛んで出て、夕方なくては歸らぬといふ。此所で記者と女房さんとの間に問答が始まる。

「では奥様は？」

「奥様なんて昔から持ちやはりまへん。」

「ぢや無妻主義ですね。」

「そんなむづかしいことを云ふたて、わしには解りまへん。」

「すると、食事や何かは、どうするんです。」

「皆な御自分でなしやはります。副食物は毎晩好きなものを買うて来て、自分で勝手にこしらへて食べはります。糠味噌などは、わしらよりか、上手に漬けはりますわ。」

「着物や、洗濯物は？」

「わしは何十年も、御世話になつてゐますが、ただの一枚だつて、わしには洗はしてくれまへん。みんな御自分で洗ひはります。着物だつて、洋服だつて皆御自分で裁つて、大概なものは自分で縫やはります。ほんまに偉い人だつせ。」

「そんな風では、世帯道具は皆揃つてゐませうね。」

「それはもう、わし家の何層倍あるか知れまへん。鍋ばかりでも澤山ありまつせ。ですさかい、あの人が國へ歸らはります時は、どうするんですやらうつて、近所の人皆云つてはります。」

「それはきつと、あなた方へ置いて行く心算でせう。」

「さうどすやらうか。へ、へ……。」

更に本人の常田翁を、海軍工廠内の造船事務室に訪ふ。面相は温顔無邪氣なること、小兒のやうである。(以下略)

以て壬太郎の生活状態を知るべきである。壬太郎が高等官になつた時、工廠長男爵中溝中將が注意した。

「常田君。君も今度は高等官になつたのであるから、ちと體面の維持をして威嚴を示すことも、考へて貰はねばならぬのう。今後はせめて工廠内にゐる時だけは、その赤帽はやめてくれんか。」

そこで、白の金巾で烏打帽子を、自分で縫ひ、彼はそれを冠つた。然し退廳後は依然として、赤帽を冠つて歩いた。

奇人か。變人か。はた又偉人か。

兎に角名物男赤帽技師は、舞鶴軍港の異彩であつた。

### 惜まれて勇退す

壬太郎は造船技師に榮進しても、昔を忘れぬ爲めに、時々は日常使用する箆を、自ら編みなどして、簡素な生活にあまんじてゐた。云ふまでもなく物質上には餘裕があつたが、さりとて蓄財して自分の手許に置くことを好まず、俸給の過半は、郷里へ送つて、親や弟妹の生活を扶養するの資にあてた。又よく部下の訓育に努め、常に二三人の將來ある青年職工を同居せしめて、懇切丁寧に學術並びに製圖等を教授し、終始一貫變ることがなかつた。かうして彼の薰陶を受けた者

が、前後を通じて實に百數十人の多きに達し、内十數名は、技手以上に昇進したといふ。その他、部下の職工で生計困難な者があれば、ひそかに被服、食料、薪炭の類に至るまで援助し、その一家の窮乏を救ふた。さうした實例は實に擧げきれぬ程である。

壬太郎は又東京、呉、佐世保、横須賀その他、遠隔の地へ出張を命ぜられることが多かつた。そんな場合、高等官でありながら、汽車は常に三等、旅館も常に二流乃至三流を選んだ。又出張する先々には、彼の世話になつた職工が住んでゐるから、宿つてくれと云はれるままに、その家で厄介になることも多かつた。勿論、禮として充分の心づけをして、物質上の迷惑をかける彼ではなかつた。それで出張の度毎の剩餘金は、積れば大きかつた。彼は、その金を、郷里の小學校へ寄附したこともあつた。

高等官ともなれば、立派な洋服をつくるのは普通であるが、彼は禮を失はぬ程の服に止めて、その節約した金を、職工の共済金に寄附した。かうして公共事

業には、努めて金を出した彼であつた。

「昔、わが松代藩の家老職恩田木工民親といふ人は、先づ施政の始めにあつて、嘘言すること勿れと云つて戒められた。だから、その治蹟は大きかつた。私は子供の頃、この恩田木工の治蹟を記した日暮硯といふ書物を讀んで、嘘を云ふことの如何に耻づべきことであるかを知つたので、自分もこれに倣つて、決して嘘を言ふまいと思つた。そして、それを實行して來たのだが、伊東元帥にだけは遠い道を近いやうに云つて、すまないことをした。」

と、晩年人に語つたことがある。

壬太郎はかういふ心掛けの人であつたから、身を持すること謹嚴、職に就いては精勵恪勤、一意専心滅私奉公の誠を致し、常に衆の模範たり得たことは、當然であつたと云へる。されば大正三年四月の恒例檢閲には、舞鶴鎮守府司令長官から、又同年五月には特命檢閲使から、共に彼は表彰された。そして大正三四年の戰役には、特に功績の見るべきものがあつたので、左の如く勳四等に敘せられた。

た。

海軍技師從六位勳五等 常田 壬 太郎

大正三四年戰役ノ功ニ依リ勳四等瑞寶章及金四百圓ヲ授ケ賜フ

大正四年十一月七日

賞勳局總裁從二位勳三等伯爵 正親町實正

これを機會として、壬太郎は齡已に六十を越してゐても、猶ほ壯者を凌ぐ元氣はあつたが、自ら老軀その任に堪へずと稱し、後進の爲めを思つて、決然骸骨を乞ふに至つた。大正五年七月十三日付を以て、其の願は允許せられ、同月三十一日特旨を以て位一級を進められて、正六位に敘せられた。海軍に職を奉じて以來、勤續實に四十一年十ヶ月であつた。時に六十五歳。

海軍部内の有志は、金盃一個を贈つて頌徳した。

### 送 別 之 辭



多年海軍工作ノ事ニ勤務シ、終始一貫奉公ノ實ヲ擧ゲ、今ヤ老軀ノ故ヲ以テ骸骨ヲ乞ヒ、幸ニ允許セラレ郷里ニ去ツテ老ヲ養ハル。  
四十有餘年間ノ實績ハ吾人ノ範トスベク軌トスベシ。別ニ臨ンデ益々欣慕ノ情ニ堪エズ。玆ニ海軍部内有志ノ贊同ヲ得テ、別紙目錄ノ品ヲ贈呈シ、聊カ頌徳ノ意ヲ表スル所アラントス。君今ヤ齡古稀ニ近シ、自愛自重龜壽ヲ保タレンコトヲ切望ス。

大正五年七月十七日

有志一同ニ代リ

海軍少將 上村 翁 輔

又舞鶴海軍工廠判任官並に工手一同からも、三組銀盃並に文庫一個を贈られた。

### 送別之辭

海軍技師常田壬太郎君、大正五年七月中、浼齡古稀ニ近キノ故ヲ以テ骸骨ヲ乞ヒテ、近日郷關ニ歸省セラレントス。余等惜別ノ情ニ堪エザルナリ。君海軍ニ職ヲ奉ズルコト、實ニ四十有餘年ノ春秋、其間宛モ一日ノ如ク至誠至直、能ク勤勉努力シテ奉公ノ實ヲ全フセラル。嗚呼偉ナル哉。人會々勉強ヲ口ニスルアリト雖モ、言行相背馳スルヲ常トス。君ガ言行ノ實踐ハ、以テ世ノ龜鑑トナスニ足レリ。宜ナル哉、君再三辭意ヲ白スト雖モ、上直チニ聽許セラレザリシニ於テヲ哉。聞ク、母堂閭ニ倚ツテ待ツコト切ナリト、錦衣ヲ纏ツテ卿ニ入ラルルノ日、貴家一門ノ歡喜、量リ知ルベカラズ。由來信州ノ地山高ク大氣新鮮也。老ヲ養フニ適ス。時下酷暑ノ候、自愛シテ益々壯健ナランコトヲ禱ル。今平素知遇ヲ辱フセシ者一同、祖道ノ宴ニ代フルニ、三組銀盃並ニ文庫一個ヲ贈呈シ、玆ニ謹デ送別ノ意ヲ表ス

舞鶴海軍工廠判任官並工手一同代表者 倉藤元次郎

この金銀の盃は誠に無慾恬淡な壬太郎を悦ばせた。時に、造船を志してからの彼の年齢を數へると、實に四十五年になるので、彼は感慨無量なものがあつた。

笑はれて意見をされしこの頭

四十五年で金の盃

と彼は詠み、往時を偲んだといふことである。

### 日本屈指の船材鑑定眼

造船事業に携はること四十有餘年、壬太郎の手によつて使用された材木は、夥しい數量に達した。それだけ日本の樹木が減少した譯けであるから、退職して歸郷したら、その埋め合はせに、彼は私財を投じて信州の禿山へ植林したいと考へ

てゐた。さて歸郷して見ると、種々の事情もあつて、其の事が不可能となり、遂に生存中には實現を見るに至らなかつた。

彼は多年の經驗から、材木の鑑定には頗る妙を得てゐた。従つて其の検査の正確さは、驚嘆すべきものがあつた。それ故舞鶴工廠に勤務してゐたにも拘らず、艦政本部の命令で、吳や佐世保等の工廠等で船材購入の場合には、鑑定を命ぜられ、検査に出張することが度々であつた。

大阪の御用商人の中には、海軍に常田技師がゐるは、船材ではどうしても利益が薄いと愚痴をこぼす者もあつたといふ。だから商人中には、黄白を菓子折にひそませて、「よろしくお願ひ致します」と、つまり賄賂を持ち込む者もあつたが、その度毎にさうした人間は、彼から懇々と不心得を諭されたので、流石の商人も、壬太郎にだけは齒が立たなかつた。

船材鑑定の點では、彼は日本屈指の名人であつたのである。

「船大工常田壬太郎之墓」

生家である長野縣埴科郡松代町清須町の邸には、年老ひた母の面倒を見ながら、末弟乙人の未亡人が、其の愛兒達と共に住んでゐた。

四十有餘年の星霜、然も孤獨の旅から久方振りて懐しい故郷へ歸り、肉親の暖かい家庭の人となつた壬太郎は、今初めて人生の春に逢つたやうな、名狀すべからざる歡喜に、雙の頬を熱くした。

236

信濃なる山に生れし我身さへ

船をもつくる世とぞなりける

異國とくにへうな原越えてゆく船を

つくりて歸る今ぞたのしみ

四十年あまりもはなれ故郷は

いづれの土地とまよひてぞ思ふ

これは彼の歸郷述懐である。舞鶴に於ける生活だけでも、二十年にも及んだのであつたから、さこそと思はれる。

壬太郎が、母のもとへ歸つて來たのは、大正五年七月の下旬であつた。ところが旅装を解いて間もなく、翌八月十一日には、この懐しい母と、永劫の別れをしなければならなかつた。彼が晩年に、第二の故郷である舞鶴を辭して、歸郷を急いだのも、この母に一日も早く仕へて、孝養を盡したいからの一念であつたのだ。

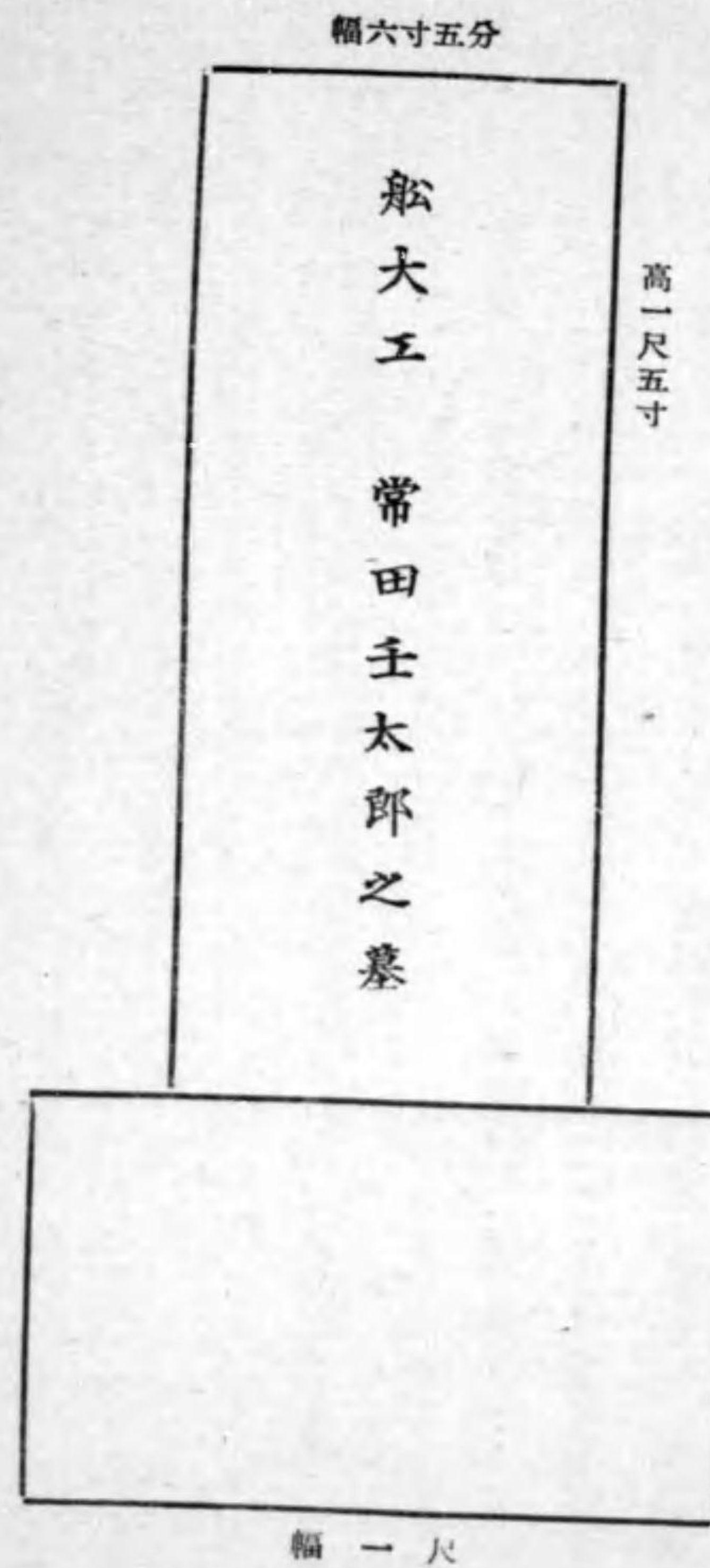
237

母は息子の歸つて來たのを、どんなに悦んで迎へてくれたことだつたか。然し、その時は既に八十餘歳の高齡に達してゐた。従つて健康も衰へてゐた。壬太郎は歸つて以來、及ぶ限り手厚い看護をしたが、天命はつきてゐた。

かうして、この「日本の慈母」は大往生を遂げたのであつた。

壬太郎は両親の墓を建てた時、それと一緒に両親の墓に並べて、手廻しよく自分の墓をも建てた。墓地は、松代町に隣接する埴科郡西條村曹洞宗法泉寺境内で、墓は圖に示したやうな所謂柴石の極めて小さい些末なものである。正面に

臺石高八寸



刻んだ「船大工 常田壬太郎之墓」といふ文字は、自ら筆を執つたもので、裏面に「明治五年船大工業ニ就キ、明治七年海軍ニ従事シ、大正五年退職ス、當時正六位勳四等行年六十五歳」と墓誌を刻み付けた。甥の常田重克しむかつが、其の草稿を見て不審に思ひ、かう訊ねた。

「伯父さん。まだ生きてゐるのに、行年六十五歳とは、變ぢやありませんか。」

「さう思ふのは、もつとも至極だ。だが、これでよいのだ。俺は御國の爲めに、船を造ることを一生の仕事として來たけれど、年を老つては思ふやうに身體の自由がきかず、若い時分のやうに御奉公が出来ないので辭めさせていだいたのだ。それが六十五歳の時であるから、俺の本當の生命は、この時に既に終つたのだ。行年六十五歳と書いても、不思議はないではないか。」

如何にも壬太郎らしい説明をした。そして遂にその文字を改めなかつた。

彼の墓の側面には、今日では「性海院舟翁偉徳重光居士、昭和六年一月十五日午前六時寂時年八十歳也」と刻み付けてあるが、これは彼の歿後、家人がほんた

の死期を追刻したものである。

### 生存中わが法會を營む

正六位勳四等の海軍技師となつても、船大工の棟梁山田清兵衛の弟子であつた昔のことが忘れられず、といふよりは壬太郎にとつては、「造船技師」といふやうな文字よりも「船大工」といふ名稱の方が、思出が深く且つびつたりと身に着いてゐたのであつたらう。その證據には常に「俺は日本の船大工だ」と唱へて、決して「海軍技師だ」とは、人に云はなかつたからである。

功成り名遂げて、文字通り錦を飾つて歸郷したこともあるし、又多額の退職金を貰つた上に、少なからぬ恩給も付いてゐた身でもあつたから、彼としては贅澤な生活も出来たのであつたが、晩年の彼の生活は、依然として簡素そのものであつた。夜具蒲團、羽織、袴、袖なしの類に至るまで、悉く質素な淺黄木綿で仕

立ててゐただけでなく、看護婦の服に似て非なる異様な淺黄木綿の衣服を、自分で裁縫して、これを常に着用し、絹物なぞ一度も纏つたことがなかつた。外出する際には白木綿で、それも手製の怪しげな烏打帽子を冠り、悠々然としてどこでも歩いた。そして「政府から多額の恩給を頂戴してゐながら、徒食してゐては、國家に對して誠に申譯がない」と常々云つて、大小幾種類かの針金を購入し、暇があるときそれを材料にして洋服釣り、物干ばさみ、電燈釣り、其他いろいろの便利な針金細工を考案しては、製作してゐた。然もそれを實費も申受けずに、知人に分ち與へて自ら楽しんでゐた。「君のところへもこれを置いて行く。使つて見てください。使つて見た上で遠慮なく批評して貰ひたいね。いけないところがあれば、改良するからよ」と、筆者のもとへも、屢々持參したことがある。

又彼の食事は、一汁一菜が定めであつた。然し、時々は息ひ出したやうにかう云つて來た。

「今日は先祖の法事をする。」「今日は兩親の法事をする。」「今日は弟於龜の法事

をする。」などと稱し、外出しては自分で鳥獸の肉や、魚類などを買ひ込んで来て、これを又自分で料理して、家族親類は勿論、近所の人達まで招いて振舞ふことが度々であつた。だが法事だとは云つても、實はその日は誰の命日でもなんでもない場合が多かつた。従つて僧侶も姿を見せなかつた。ただ談笑しながら、手製の料理を食べて、故人を偲ぶだけであつた。

或る日のことであつた。例のやうに人を招き、料理を饗し、さうして彼は云つた。

「さて、今日は俺の法事だから、皆さん、どうか遠慮なく澤山に召上つて下さい。」

彼は近所から又、子供を大勢集めて来て云つた。

「さあ、みんなには、お菓子をやらう。」

と用意の煎餅や、饅頭を分け與へ、その喜ぶ様を見て、自分も悦に入つてゐた。一家のものが怪しんで、彼に云つた。

「まだ生きてゐなされるのに、法事はおかしなものではありませんか。」  
すると、彼はにこにここと笑つて。

「世間一般の人は、死んでから法事をする。だが俺は、生きてゐるうちに、自分で法事しておくのだ。貴様達は、俺が死んでもろくな法事はしてくれないだらう。いや、實はして貰つたところで、俺は一向に有難いとは思はないよ。死んでから大金をかけて法事をするよりは、生きてゐるうちにして置く方が、貴様達も御馳走が食べられてよからう。あつ、は、は」  
こんな、とぼけたやうなことを云つて、彼は子供のやうに笑つた。

### 細引三尺の訓

かういふと、晩年の壬太郎は、ただの變り者の好々爺のやうにも見えるが、甥や姪の躰に就いては、なかなか嚴格であつた。平素、口癖のやうに「武士の子

は、轡の音で眼をさます。下司の子は、茶碗の音で眼をさます」と云つて戒めた。又「耻を知らぬ人間ほど、厄介な者はない。だから耻を知るやうに、心掛けることが大切だ」と説き、甥や姪が少しの不心得があつても、割れ鐘のやうな大聲を發して、叱り飛ばしてゐた。

又或る日のこと、甥と姪とに向つて、「俺が死んだら、お前達には、細引を三尺づつやるつもりだ」と、彼が奇妙なことを云つた。「だが、そんなものは使はずに、濟むやうにしてくれ」とつけ足した。つまり彼の言葉の意味は、「俺が死んだ後も、人の笑ひを招くやうなことは決してするな、随分しつかりやつてくれ、もし、それが出来なかつたら、いつそこれで首でもくくつて死んでしまへ」といふのである。一見、慘酷な奇言の如くにも思はれるが、その真意をさぐつて、これを味へば、誠に親切で、心底には溫情がこもつてゐることが知られるのである。

### 好きな圍碁を絶つ

壬太郎は、圍碁を娛樂の隨一として、暇を見出した時には、よく其の技を戦はせたものである。然るに弟を愛するのあまりに、この好きな道を斷念するに至つた。といふのは弟の於龜も亦、兄に似て圍碁を好み、學生時代から熱中し、醫を開業するやうになつてからは、一層これに耽り出した。

この弟の有様を見て、壬太郎は圍碁に耽ることの弊害を痛感し、なんとかして弟の圍碁熱を冷却せしめようと考へ出した。それには、どうしても自分からその範を示さねばならぬと深く決心した。

彼は弟に向つて云つた。

「碁を圍んで、樂むことは結構である。だが、お前のやうに碁に耽つて、その爲め大切な醫業に障りがあるやうでは、これは見逃す譯けにはいかん。人に迷惑を

かけては、健全な娯樂ではない。今後は程加減にしてくれ。このことは、決してお前にばかり實行せよといふのではない。俺も斷然やめることに決心したのだから、兄が無理をいふと思つてくれるな。」

そして、彼は即座に筆を執つて、左の訓言を書いて弟に與へた。

たのしみつきて、かなしみ來たらば、たのしまざるにますことなし。

三思一言九思一行不可<sub>レ</sub>忘。

弟を戒める爲めに、好きな圍碁を先づ自ら廢し、生涯これを嚴守した壬太郎、ここにも彼の偉さ、意志の強固であつた一面が窺はれる。

### 訓戒五條

昭和三年の新春を迎へた時のことであつた。壬太郎も既に、齡を重ねること七十七となつたので、甥でその後嗣となつてゐた常田重克が云つた。

「伯父さん、七十は古來稀と云はれてをりますが、伯父さんはそれよりも、更に七年も長生されたのですから、お芽出度いことだと思ひます。就いては世間では、よく喜壽の祝をしますから、宅でも致しませう。」

「いや、そんなことはしなくてもよい。俺は長生したくてしたのではない。自然に長生したまでのことだ。祝ひ事など、一切無用だ。」

壬太郎は甥の言葉を、取上げやうともしなかつた。そして語を次いで云つた。「人間は、長生しただけで、芽出度いといふのは間違つてゐる。若くて死んでも、國家に大きな御奉公をすれば、それは芽出度いから、祝ふのも結構である。」



俺も聊か國家の爲めに盡したつもりではあるが、然し祝ひ事なぞするには及ばんことだ。祝ひ事をする代りに、書いてやるものがある。」

#### 訓戒五條

- 一、身體を丈夫にする事。
- 一、精神を潔白にする事。
- 一、膽を練る事。
- 一、徳義を常に忘れぬ事。
- 一、人に瞞着されぬ事。

#### つきぬたのしみ

たのしみつきて、かなしみ來たらば、たのしまざるにますことなし。

右のうち、「つきぬたのしみ」は、弟於龜に書き與へたものと同訓である。その頃更に彼は、「明治五年より昭和三年に至る浮世の旅」と題する左の一文を草して、これを親戚知己に配布した。

信濃なる山に生れし船大工、海原越えて戦ひを、爲すに用ふる其船を、我が日の本で造らんと、明治五年に國を出で、相模の國の横須賀に、明治七年たどりつき、初めて見たる軍艦を、造り初めしその時は、五十五年の昔なり。造りて歸る其時は、丹後の國の舞鶴で、年は六十五歳なり。十八歳の其時の、心に浮ぶ我國の、行末こそは船により、力を盡す時なるぞ。思ひを果せる身となりし、七十七のけふぞ樂しき。

昭和三年四月三日

常田重光

廢藩以後壬太郎を實名としたが、實は通稱壬太郎、諱を重光といつたのである。

### 海沼教隨尼

松代紙屋町に、大信寺といふ淨土宗の寺院がある。其處の住職であつた海沼教隨といふ尼僧は、既に八十有餘歳の高齢でありながら、鏗鏘壯者を凌ぐ元氣で、布教に従事してゐた。教隨尼は武家に生れたが、幼い頃より深く佛門に歸依し、學問もあり、道心も堅固で、地方人からは、活佛のやうに渴仰されてゐた。

壬太郎が少年時代、松代藩士飯島楠左衛門に就いて、國學を學んだ頃、教隨尼も同じ藩士の娘として、同門の學徒であつたから、彼と共に机を並べて學んだこともあつた。つまり二人は、筒井筒振分髪（つづみ）の昔から、互によく知る間柄であつたのである。然るに壬太郎は、明治五年、二十一歳の時に上京してしまつたので、

二人は相見ざること、實に五十年の久しきに及んだ。だから、いつしか忘れられるもなく忘れてゐたが、歸郷して見れば、大信寺はすぐ隣りであつたから、挨拶にも行き、それから久方振り（つづみ）で昔話にふける機會も度々であつた。壬太郎は、教隨尼の女ながらも廢佛毀釋の時代に出家して、長の年月、ひたすら法（ほ）の道に精進して來た堅固な志に感じ、機會ある毎に自邸に招待し、老尼の大好物のウドンを自ら作つて饗應したりした。

或る日のこと、教隨尼が來て、いつものやうに佛壇に向つて、一禮の後、經を讀まうとしたので、その時彼は云つた。

「教隨さん。いつもお經を上げて下さる御志は誠に有難いが、どうでせう、今日

は一つお經の代りに、何か有益なお話が願はれませんか。」  
彼は例の調子で、あけすけで、聞く人によつては、無禮にも取れる譯けだが、教隨尼は、少しも氣にしない様子で。

「はい。結構な仰せです。だが、お經はお釋迦様の仰せられたことや、その行ひ

を書き現はしたものです。それで私共は、朝夕に讀經して、自分の修養に致してをります。だから御迷惑でも、先にこれだけは讀ませて下さいませ。」  
教隨尼はいとも敬虔な態度で答へた。それ以後、讀經の際、壬太郎は必ず老尼の背後に端座して、終るまでは身動きもせず傾聴してゐた。

### 生を終る

壬太郎は、昭和六年一月十五日午前六時、八十歳の高齡を以て、その生涯を終つた。

彼が再び起つ能はざるまでに、その病が革まり、寢返りさへも出来ぬやうになつた時、たまたま海沼教隨尼が見舞に來た。老尼は彼の死期が近づいたことを察知して云つた。

「御臨終に當つて、どうか後の人々の爲めに、何か御言葉を遺しておいていただ

きたうございます。」

だが、壬太郎は黙して一言も語らなかつた。

俳聖芭蕉の臨終の時、座に侍つてゐる門弟の一人が、辭世を願つたところ、俺の今迄に作つた句は、皆な辭世である。今更、辭世の句を作る必要はないと答へたといふ。これと同様で壬太郎も亦、平素の言行を以て、自分の辭世と信じてゐたのであらう。

壬太郎の呼吸は、刻々に迫つて來た。

「御念佛を唱へて下さい。さうすれば極樂往生が出来ます。」

教隨尼は、かう云つて慰めた。すると彼は、かすかに眼を開いて答へた。

「南無阿彌陀佛と南無妙法蓮華經とは、どちらがききめがありますか。」

といふ奇問を發した。淨土宗の尼僧であるから、南無阿彌陀佛と唱へた方がよいと答へるかと思つたところ、

「それは、どちらでもよろしうございます。」

と教隨尼は答へた。

この答を聞いた壬太郎は、御題目と稱名の二つを、一字々々指を折つて數へ上げた揚句。

「稱名の方が一字少なくて、唱へるにも樂であるから此方にする。」  
と云つて南無阿彌陀佛を唱へながら、彼は安らかに大往生を遂げた。如何にもこの人らしい最後である。

壬太郎は極度に迷信邪教を嫌ひ、且つ僧侶の腐敗墮落を嘆いてゐた人であつた。そして、徒らに神佛に救ひを求めることは、薄志弱行の輩のすることであると云つてゐた。

254

では、壬太郎には、神佛尊崇の精神がなかつたのであらうか。いや、いや。壬太郎は、伊勢皇大神宮を、朝夕遙拜することは、一日として缺かさなかつたのである。自分で建造した軍艦の進水式の時は、艦が水上に浮び終るまで、一心に皇大神宮を祈り奉つて餘念なく、無事に進水式が済むと、直ちに又皇大神宮に御禮

を申上げて、やうやく自分に返るといふ有様であつた。

### 職場文學

壬太郎は天地自然の美を愛し、一壺の酒を傾け盡して、興いたれば詩歌を作つて自ら樂むといふ、詩人肌のところがあつた。然し、その性格が恬淡で、ものごとくに頓着がなかつたから、修辭などの點には、一向拘泥せず、感興の趣くままに、或は三十一文字、或は十七文學といふ風に、表現したままであつた。従つて洗練の足らぬ憾みはあるが、それだけ反つて真情流露の素朴さがある。所謂素人の文學であるから、假りに職場文字と名づけて、左に採録してみる。

255

何歳で歌を作り始めたか、それは判明しないが、筆者の知る限りでは、二十一歳の時、船大工を志して上京した際の、左の一首が初見である。

君がため國のためにて行く旅は

千代のわかれもなにいとほまじ。

又明治十六年、川崎造船所へ出張し、高砂丸建造の任務を果した際の作には、次のやうなものがある。

義を立てて身は此國にすつるとも

名を後の世にのこしぬるかな。

横須賀でめぐみをうけしむくいをば

いま時を得てなすぞうれしき。

今君のめぐみをうけて日の本の

ために心をつくすうれしき。

来て見れば今を盛りの梅の花

香をば雲井へとどけあげなむ。

學校がくによらず利による人ぞあはれなり

神のめぐみもなきをおもへば。

明治三十三年、舞鶴軍港起工に際して作つた長歌には。

日本の、丹後の國の北國に、港も多き其中に、名も舞鶴と呼ばれたる、港を北の守りにと、置く軍艦の碇泊の、軍港にとて定められ、其軍艦の扱ひを、なす鎮守府を加佐郡の、餘内村あまうちの其字の餘部下の城山の、元本丸に置かれたり。是ぞ餘内近村の、にぎはふ基となるならむ。古き都は丹後なる、國と丹波の境にて、大江山とぞよばれたる。鬼のすみかのあるぼとの、人もかよはぬ國なれど、人智の進む此御代の、明治二十とまた十の、春のはじめにはじまりて、異ちが國人をおどろかす、軍港とこそなるぞ目出たき。

當時、隧道開鑿に従事したり、材木や土砂など運搬する時に唄ふ民謡が、如何にも卑猥であつたので、彼は次のやうな音頭歌詞を作つて、ボーリング音頭と命名、土工等に唄はしめた。明治三十三年三月二十七日の作である。

### 一、地獄

皆の衆や、氣張らんせ、この錐を、揉み込んで、地獄まで、揉み込んで、閻魔のさ、領分へ、揉込んで、鬼の焚く、釜までも、揉込んで、打ち割つて、皆の衆や、この娑婆で、鬼までも、打ち殺し、地獄まで、行つたなら、其時は、鬼共が、逃げるだろ、閻魔まで、逃げるだら、其時は、汗をかき、流しても、錐揉を、することが、愉快だろ、愉快だろ。

### 二、鎮守府

皆の衆や、聞きなされ、今度な、舞鶴の、港のな、其うちの、餘部に、海軍

は、建築の、支部をな、置かれてき、餘部や、倉梯くらはしの、田畑をな、平らにし、山もな、切崩し、海もな、掘下げて、埋立てて、見たことも、まだない、鎮守府を、置かれてき、北海の、守備にな、なさるとき、鎮守府は、餘部や、倉梯の、海をな、軍港に、なさるとき、軍艦を、へつさとな、つながれて、戦争のな、ある時の、準備にな、なさるとき、鎮守府は、造船の、一部もな、置かれてな、軍艦を、造るとき、機械もな、造るとき、軍艦を、修復する、船渠もな、出来るとき、鎮守府は、兵器のな、工場を、置かれてな、手入れもな、なさるとき、鎮守府は、水雷の、一部もな、置かれてな、戦争のな、ある時の、準備にな、なさるとき、鎮守府へ、病院も、建てられて、怪我人や、病人の、療治をな、なさるとき、鎮守府は、監獄も、置かれてな、悪人の、始末まで、なさるとき、鎮守府は、知港事も、置かれてき、港のな、角からな、角までも、きよといほど、細かにな、締りをな、なさるとき、鎮守府が、出来たなら、餘部や、倉梯は、繁華のな、土地にな、なさるとき、皆の衆や、慾ばか

り、かわかすに、へつさとき、働いて、鎮守府が、一年も、半年も、一月も、出来るだけ、早くな、出来たなら、其時は、皆の衆が、是までに、聞いてもな、見たこともな、なき程に、愉快だろ、愉快だろ。

### 三、運河

春はな、花の咲く、時だとき、丹後のな、加佐郡の、餘内の、其中の、字のな、餘部の、上下の、土地にな、花の咲く、春がな、來るとき、餘部の、上下が、市街にと、なりてき、人家もな、現在の、百倍も、殖ゑたなら、花の咲く、春もな、來るとき、市街もな、衛生を、第一に、氣をつけて、作つたら、花の咲く、春もな、來るとき、市街に、隣する、軍港も、衛生が、第一で、軍人の、生命を、保護せねば、ならぬだろ、悪疫は、土地のな、不潔から、起るだろ、軍港を、清潔に、したならば、花の咲く、花もな、來るとき、市街のな、下水はな、人家のな、殖ゑるほど、不潔にな、なるである、此水を、軍港に、流したら、衛生を、害すだろ、此水を、餘部の、下からな、長濱へ、堀割

りて、流したら、軍港は、衛生に、缺點を、無くすだろ、此時は、花の咲く、春もな、來るとき、長濱へ、堀割が、出来たなら、この土地の、衛生の、缺點も、無くすだろ、其時に、花の咲く、春もな、來るとき、長濱へ、堀割が、出来たなら、餘部の、市街はな、運搬の、便利をな、充分に、得るである、其時は、花の咲く、春もな、來るとき、長濱へ、堀割が、出来たなら、運搬は、小舟でな、出来るだろ、其時は、花の咲く、春もな、來るとき、長濱へ、堀割が、出来たなら、市街のな、衛生と、運搬と、軍港の、衛生も、充分に、出来るだろ、萬年も、衛生と、運搬は、充分で、あるである、其時は、此土地の、幸福と、花の咲く、春もな、一度にな、來るとき、花の咲く、春もな、來るとき。

### 四、教育

時はな、明治の、三十三で、春のな、彌生にな、玉とな、見る程の、男の子がな、餘部の、遠近に、生れたとき、芽出度いな、愉快だな、其子がな、きよと

い程、壯健で、日立つとき、愉快だな、其子がな、早くな、立つてな、歩んだら、愉快だろ、其子がな、早くな、話しがな、出来たなら、愉快だろ、其子がな、小學の、學校に、出たならば、愉快だろ、其子がな、尋常の、學科をば、満點で、卒業を、爲したなら、愉快だろ、其子がな、高等に、進級を、爲したなら、愉快だろ、其子がな、算筆や、作文や、理化學や、畫學やら、體操も、教師のな、きよといとて、驚いて、逃げるほど、覺えたら、愉快だろ、其子がな、品行も、方正で、高等の、小學を、満點で、卒業を、爲したなら、愉快だろ、其子がな、小學の、學力で、官報や、新聞や、雑誌をな、見たならば、餘部の、今日の、我々の、心とは、違ふてな、日本の、文明の、男子のな、魂を、持ったなら、其子のな、親達は、此上も、無き程に、愉快だろ、其時は、我々も、愉快だろ、其子がな、丁年の、男子にな、成る時は、此土地も、日本で、指折の、繁華のな、市街にな、なるである、なるである、ゆくわいだろ、ゆくわいだろ。

右は、土工等の中にも、何故軍港が建設されるのであるか、それを知らずにいる者があるので、知らしめる爲め、歌詞に方言を取入れて、判り易く作ったもので、一時は盛んに唄はれて、地方人の教化と労働者の能率を高めることが出来たといふことである。

舞鶴鎮守府の門外通路に櫻樹を植ゑたことを、晩年郷里にて、追憶して作った歌に、かうした情味深いものがある。

過ぎし年植ゑし櫻は見えねども

春を迎へて花やさくらん。

此世ではながく暮せしあまるべに

うるしさくらの花ぞ戀しき。

鎮守府の道の櫻も年を経て



またこの春も花や咲くらん。

病院の裏にうゑしがたけのびて

しだれ櫻の花見ゆるかも。

經理部の庭に咲くらむ眞白にぞ

こぶしの花の香りゆかしき。

工廠の庭に植ゑしがこの夏も

花をもちしか白き木蓮。

明治四十四年秋には、舞鶴に於て勤務の餘暇を利用して、故郷から招き寄せて置いた母親や甥、それに書生、近所の人等多勢を引率して、彼は茸狩を催した。その時の作には、

あづまにて見ることぞなきたけがりを

けふきてなせし丹後路の山。

あいらしき子のたづぬるもうち忘れ

心をそらの今日の茸がり。

來て見ればいつも樂しき山遊び

秋の心ものどかにぞなる。

五年八月、慈母の死を悼みての作には、

別れても會ふを常とぞ思ひしに

今日の別れは會ふこともなし。

咲けばちるものとは知れど残り惜し

花のかほりの袖にのこりて

又歸郷後の作には、追懐の歌が多かつた。

ひとりゐて子はあらざれどたのしけれ

丹後にありしむかしおもへば。

六十を六つ高峰を登り越して

屠蘇をあぢはふ金のさかづき。

大正の六つの年月今朝越して

いさづきにのむ屠蘇ぞたのしき。

寒に入り川の氷の張りかさみ

川口あふれ道を流れる。

二十度にあまる寒さもこたつにて

くらす心のけふののどけさ。

餘部の寒さも棲めば寒けれど

さむさのまさる故郷の今日。

夏くれば心に浮ぶ舞鶴の

いさつの川の鮎の鹽やき。

腹も身のうちと知れどもひまなれば

食ふをたよりにくらすたのしき。

又大正十年には、

たのしみにくふを仕事でひまもなし

と親友の山田一生に贈つたところ、同人から、

わづらふひまもなきぞめでたし。

と下の句を寄せて来た。

昭和三年の作には、

山を出て山に歸りし船大工

心ゆたかにくらす山中。

海のなき山でくらすせばのどかなり

青空のほか眼にも見えねば。

赤帽技師（終り）

### 常田壬太郎年譜

嘉永五年（一歳）三月十一日信州松代町に生る。松代藩士常田衛門民重の長男、通稱壬太

郎、諱重光。

安政六年（八歳）初めて學に就く。

文久元年（十歳）青木半左衛門（經學）、飯島楠左衛門（國學）の門に入る。

文久二年（十一歳）馬術入門。

元治元年（十三歳）春佐久間象山の説を聞く、七月十一日象山横死。

慶應四年（十七歳）四月松代藩遊撃隊銃手として王師に従ふ。五月初旬歸藩。松代藩兵制士官學校に入學。

明治三年（十九歳）十二月松代藩兵制士官學校廢校に付退學。

明治四年（二十歳）松代藩西洋兵學寮士官學校設立され其助教となる。たまたま西國立志篇を讀み造船家たらんと志す。

明治五年（二十一歳）七月上京船大工の弟子となる。

明治七年（二十三歳）横須賀造船所の見習工となる。祖父鏐太夫貫儀歿す年八十。

明治八年(二十四歳) 茶葉服を考案着用、解場の大黒さんと呼ばれる。

明治九年(二十五歳) 九月横須賀養舎に入學。

明治十四年(三十歳) 横須賀養舎卒業。組長と仰ぐ尾鷲與兵衛に請はれ製圖學を教ふ。

明治十五年(三十一歳) 組長に昇進。

明治十六年(三十二歳) 川崎造船所へ派遣され高砂丸を建造し、造船技術を認めらる。

明治十七年(三十三歳) 初めて書生田中樞吉を養ふ。

明治十九年(三十五歳) 吳鎮守府新設に付測量に従事。

明治二十一年(三十七歳) 海軍造船技手見習となり、海軍省艦政部勤務となり、東京へ移往。

明治二十二年(三十八歳) 帝國憲法發布の盛典に母を招いて孝養を盡す。

明治二十三年(三十九歳) 造船技手に任ぜられ軍務局臨時建築部勤務となる。

明治二十八年(四十四歳) 日清戦役の功に依り勳八等に叙せらる。

明治二十九年(四十五歳) 舞鶴軍港新設に付測量に従事。

明治三十年(四十六歳) 舞鶴軍港起工、工事を監督す。

明治三十二年(四十八歳) 日光青寫眞術改良の功に依り五十圓の賞金を受く。

明治三十四年(五十歳) 舞鶴鎮守府工廠付造船技手を命ぜらる。

明治三十八年(五十四歳) 日露戦役の功に依り青色桐葉章及金二百五十圓下賜。

明治三十九年(五十五歳) 海軍造船技師(高等官七等)に任ぜらる。

明治四十二年(五十八歳) 二月三日父民重病歿年八十五。

大正二年(六十二歳) 高等官五等に進み従六位に叙せらる。

大正四年(六十四歳) 勳四等に叙せらる。

大正五年(六十五歳) 正六位に昇叙、七月退いて松代へ歸る。八月十一日母いを病死、自ら

「船大工常田王太郎之墓」と刻める墓を建つ。

昭和三年(七十七歳) 訓戒五條を親戚知己に書して與ふ。

昭和六年(八十歳) 一月十五日歿す年八十。

附  
錄

日本造船史話

## 海權と造船

二千六百有餘年、わが國は海國日本として隆々發展の一途を續けて現在に及んでゐる。この事あるがためには、海國の特性として海權の確保、海外出征及び沿岸の防禦に任ずる廣義の海軍力なくしてはかなはぬことである。この意味において海國たる日本には、上古からこれに任ずる海軍力の存在したであらうことは推察に難くない。神代においては、素戔嗚尊は特に海を愛されて、樟や檜、杉などで舟を造らしめ、この舟で朝鮮と往き來なされたと云ふ。このやうに、海權の確保とその展開あつて、國家の實力は擴充を見るのである。そして往昔の海權は主として海軍の力（今は空軍もある）に依つて獲得せられたから、従つて海權と造船との關係が密接不離たることは言ふまでもない。海國日本の國史に占めてゐる造船の位置は、このやうに重要なのである。

## 上代の航海具

數千年前のわが航海具の全貌を知ることには至難であるけれども、最初は極く單純な浮體を使用した。即ち水に浮ぶ物である。學者は船の原始形態及びその發達につき、神話學的、考古學的、工藝學的、人種學的の諸資料を綜合することによつて、およそ次ぎのやうな發展段階を認めてゐる。

第一段階——浮揚具 瓢箪、革囊、丸太等が想定されてゐる。瓢箪や革囊は游泳補用具であつた。土器も用ひられた。

第二段階——筏 丸太の次ぎに現はれたのが筏で、木材または蘆葦の類を組み合はせたものである。欄干、坐席などを裝備したのもあつて、これは筏船と呼ばれた。

第三段階——刳舟くりぶね 樹幹を刳つて造つた獨木舟の一種である。舊アイヌ型と原

日本型との二型式が認められるが、舊アイヌ型は脆弱で、原日本型は頑丈である點に兩者の技術的性格が現はれ、上代すでに日本人の造船技術の優秀性を示してゐる。刳舟といつても、巨木で造つたものは、五十人位は収載するに足るものがあり、顛覆を防ぐためには二つの舟體を並べ、横材でこれを連結した。初期は一本の樹幹から造つた單材刳舟であつたが、それが發達して二本以上の樹幹を刳つて綴縫した複材刳舟を生じた。材は多く樟を用ひた。

第四段階——皮船 船體の外部を樹皮や獸皮で張つたもので、船の原始型である。無目籠なめかこ、龜甲、蘿藤船、樺皮船などが、これに屬する。これらは南方的のものと北方的のものと、兩性質を備へてゐる。材料の相違によつて、皮船、或は革船といふ。

第五段階——縫合船 刳舟が發達し舷側板が附隨せられて、縫合船が現れた。主要部に刳舟が残り、これに補助部を附けたものらしく、鐵釘以前の複材船である。

第六段階——構造船 鐵釘で釘着ける船である。宮崎縣で發掘された埴輪によつて、かなり發達した構造船のあつたことが想定される。

以上のやうな航海具を利用して、上代の日本人は、シベリア、朝鮮、北支那、中支那、南洋方面の文化を次々に移入したのであつた。

### 創 建 期

皇國の創建は、天孫降臨によつてその端緒を開かれ、造船の歴史は、皇祖の海路大遠征によつて始まるのである。

記紀に従へば神武天皇の御東征は、舟師（フナイクサ）を率ゐさせられて、日向から主として海路を取られた。そして御途中において、吉備で多數の軍船を造らしめられた。その船は和船型の軍艦であつた。

崇神天皇の十七年（皇紀五八〇）には、大いに海運を御奨勵になり、諸國に課

して船を造らしめられた。

仲哀天皇の八年には、筑前縣主の祖熊鰐が、九尋の船を造つて奉つたといふことである。

次いで神功皇后の御征韓（八六〇）となるが、大海の集團航行であつたから、この御事は上古における造船技術に、大なる貢獻があつたものと考へられる。

應神天皇の五年には、伊豆國に課して長さ十丈の船を造らしめ、快速力が出たので枯野と命名された。これが船名の起源である。應神天皇の三十一年には、諸國の調貢船五百艘を武庫港に集合せられたが、新羅人の失火のために延焼したので、新羅王がその罪を謝して造船工を獻じ、造船の事に従はしめた。新羅の造船工は攝津の猪名部に居らしめたので、世人はこれを猪名部の工人と呼んだ。この時をもつて、新羅式の造船法渡來の始めとする。

仁徳天皇と履中天皇の御代に兩枝船ふたまたを造らしめられた。これは一幹から派生した双股を利用した船との傳説があるが、刳舟類似のものであつたらうと云はれ



てもゐる。

わが國と大陸との間に公的交通が開かれたのは、推古天皇十五年（一二六七）の遣隋使の時からである。この翌十六年に飾船が造られ、同二十六年にも安藝で造船の事があつた。飾船とは錦繡で裝飾した船で、これは舒明天皇の四年にも造られてゐる。孝徳天皇の白雉元年（一三一〇）にも安藝で造られたが、この船は百濟型の曲線型で、舳艫ともに高くあがつてゐた。

齊明天皇の四年（一二一八）、越この國守安倍比羅夫に命じ、舟師百八十隻を率ゐて蝦夷を討たしめ給ひ、翌々六年には比羅夫は再び命を奉じて肅慎（ツングース族、後彼等の住む地方の稱）を討つたといふから、強力な艦隊の編成と、造船術の進歩及び航海術の熟達とに想到せずには居られない。この年、駿河に命じて巨船を造らしめた。

以上わが海權創建期ともいふべき第一期の船舶は、その型式が多種多様であつて、ツングース、インドネシア、印度支那、エスキモーなど、各種の系統が混つ

てゐた。それが、やがて少數の堅牢な型式にまとめられたが、この事はわが上代の鬱然たる造船能力を語るものである。

### 衰 退 期

文武天皇の大寶元年（一三六一）には大寶律令が成り、令によつて兵部省に主船司を置き、河攝紀の三國で多數の船を造らしめ、越えて和銅二年（一三六九）にも越前、越中、越後で同じく多數の船を造らしめられた。この事業は續いて、淳仁天皇の天平寶字三年（一四一九）には新羅征討の計畫を立て、諸道に令し三ヶ年に五百隻を造らしめられたが、それは一船に約百五十人収載できる船であつた。この連年の戦闘準備にもかかわらず、新羅遠征の計畫は沙汰やみとなつた。

遣唐使の制度は、菅原道眞の上申によつて、宇多天皇の寛平六年（一五五四）に廢止された。ここに大陸との公的な繋がり絶たれ、私的交通時代となつたが、

この時代には一般人の海外渡航は禁止された。

この期間は謂はば海權衰退期であつた。一時は海權の擡頭した期間もあつたが、それが維持されなかつたからである。

### 海權分立期

新羅は高麗に滅ばされ、宋は元に亡ぼされた。元はその餘勢を伸ばして、遂にわが國に迫つて來た。所謂元寇は、後宇多天皇の文永十一年（一九三四）と弘安四年（一九四一）の兩度にわたつてゐる。當時のわが國民意識は頗る旺盛であつたから、弘安の役では特に神風の天祐もあつて敵の大軍を悉く海底の藻屑と化せしめた。然し、この結果は、明らかに強固なる海軍の建設なくしては、國防の全きを得ないことを覺つた。元寇繪卷にもある通り、當時のわが軍船は大型漁船ほどのものであつた。

弘安四年から十一年後の正應五年、わが商船は支那海を横ぎつて慶元路に航し、更に正安元年（一九五九）、徳治二年（一九六七）、延慶二年（一九六九）、文保元年（一九七七）などにも、わが商船は慶元路その他の地に航して貿易を行つてゐる。これが室町時代まで續き、遂に明代の猛烈な倭寇となつたのである。

後村上天皇の興國二年（二〇〇一）に、天龍寺船二隻が元に派遣されたが、この構造は不明である。室町時代後期の遣明船は、容積五百石乃至二千五百石であつた。

足利義政が遣明使節のために選んだ乗船十一隻は、左表の通りである。

(船名)	(所屬港)	(容積)	(所有者)
和泉丸	門司	二、五〇〇石	公方
寺丸	"	一、八〇〇	大内新介
宮丸	"	一、二〇〇	細川左京太夫
疆増丸	富田	一、〇〇〇	

宮丸	一、〇〇〇
住吉丸	七〇〇
宮丸	七〇〇
宮丸	七〇〇
熊野丸	六〇〇
熊野丸	六〇〇
藥師丸	五〇〇

これらの船の所屬國別は豊前(三)、周防(四)、備後(四)であつたから、瀬戸内海に巨船の分布してゐたことが知られ、また造船所もその附近にあつたことが判るのである。船型はジャンク型で三檣であつた。

次いで享徳二年(二一一三)の遣明船は十隻であつた。名稱は唐船とあるがジャンク型でなかつたことは、日本風土記に「日本造船。興ニ中國ニ異。必用ニ大木。取方合縫。不使鐵釘。惟聯鐵片。不使麻筋桐油。惟以草塞罅漏而已」

と見えてゐるので判る。造船は日本人の優秀な技術に依つたが、資本が少なかつたので、在留支那人が多く投資した。

豊臣秀吉が國內を統一するに及んで、無統制な倭寇は漸く影をひそめ、それに代つて、後陽成天皇の文祿元年(二二五二)御朱印船の制が布かれ、わが貿易船は、南海諸國にまで進出するに至つた。

秀吉は征韓役のために文祿元年、兵船七百隻を醸したが、この役の旗艦ともいふべき巨船は日本丸であつた。ここに我が造船術は急速の進歩を見せた。

以上の期間は、海權は諸侯が分有して統一を見なかつたから、海權分立期であつた。

### 大船建造禁止

いはゆる御朱印船の最初は、九艘船に始まる。その割當は左表の通りである。

(船主)	(所屬港)	(型式)	(隻數)	(仕向地)
末次平藏	長崎	ヨーロッパ型	二	不詳
船本彌平次	"	不詳	一	不詳
荒木宗右衛門	"	ヨーロッパ型	一	東京
糸屋隨右衛門	"	不詳	一	不詳
茶屋四郎五郎	京都	日本型	一	交趾
角倉與一	"	支那型	一	暹羅
伏見屋	"	不詳	一	不詳
伊豫屋	堺	不詳	一	不詳

御朱印船とは、貿易許可の渡海朱印状を受けた商船をいふのである。この船の大きさは、角倉船は長さ二十間、幅九間、人員三百八十人を収載したと渡天物語にあるから、他の八艘も大差はなかつたらしい。文祿の次ぎの慶長九年から元和二年に至る十三年間に、朱印状を受けた船は百四十五を數へることが出来る。

慶長十年(二二六五)、徳川家康は顧問の英國人ウヰキリアム・アダムス(日本名、三浦按針)に命じて、伊豆國伊東で八十噸と二百二十噸の西洋型帆船二隻を造らしめた。二百二十噸の方はサン・ブエナベンツィラ號と呼び、上總の岩和田に漂着したマニラ總督ロドリゴの護送にあてると同時に京都の商人田中勝介の一行を同乗せしめて、慶長十五年ノブ・イスパニヤに向つたが、この船は彼の國人の所有に歸して、我國へは歸航しなかつた。

慶長十八年、伊達政宗の使者支倉常長が、陸奥月ノ浦を出帆、ローマに向つた船は、幕府の船大工がソテロの指導の下に、その前年造つたもので、長さ十八間、幅五間半、帆柱の高さ十六間半、彼の地(アカブルコ)での寫生圖を見るとヨーロッパ型をなしてゐる。

明正天皇の寛永七年(二二九〇)、徳川家光は天地丸を造つた。長さ二十七間、櫓百挺の大船であつた。翌八年には更に伊豆で軍艦安宅丸を造つた。これは天地丸よりも大で、長さ三十八間、櫓二百挺であつた。

諸大名以下の五百石積以上の船舶建造を禁止したのは、寛永十二年であつたが、同十五年に商船だけはこの制限外となつたのを觀ても、大船建造禁止の主たる目的が、諸侯の海軍力を殺ぐにあつたことが首肯される。

翌十三年、海外渡航が全く禁ぜられてからは、わが造船界は急激に衰へて來た。即ち自ら海權鎖封期を招いたのであつて、全くもつて残念なことであつた。

### ペリー來航

鎖國政策實施以後の造船事業の主なるものとしては、靈元天皇の寛文九年（二三二九）に末次平藏の造つたオランダ型船が先づ擧げられる。長さ十五間、櫓六十挺、五百石積だ。次いで延寶元年（二三三三）、徳川光圀は長さ十八間の快風丸を造つたが意に滿たず、更に第二、第三の造船となり、第三の快風丸を巖して蝦夷探檢に向はしめたのは、東山天皇の元祿元年（二三四八）であつた。

光格天皇の天明六年（二四四六）には、幕命によつて大串平五郎が長さ九十尺、千五百石積の日支蘭三型混合の三國丸を造り、文化七年（二四七〇）には船頭松右衛門が小倉侯の命によつて千石積の相生丸を造つた。この間には、露船が蝦夷に現はれたり、長崎に來たり、林子平の海國兵談の著があつたり、英船の來航、外國船擊攘令等々、四邊には騒然たる雰圍氣が濃くなる一方であつた。

かうしたうちに、嘉永六年六月、北米使節ペリーが浦賀に、七月には露國使節チャーチンが長崎に來航するなどあつて、幕府は遂に大船建造の禁を解くに至つたのである。

### 開國後

大船建造の幕議は、既に弘化三年七月、老中阿部正弘によつて内定した事があ  
るが實現されず、ペリーの率ゐる軍艦四隻の來航強請に會ふに及んで、ここに己

むを得ずして開國の腹をすえた結果、孝明天皇の嘉永六年（二五一三）九月十五日「方今之時勢大船必要之儀に付、自今諸大名大船製造致し候儀御免被成候云々」の解禁令となつたのである。

幕府の近代的造船事業は、いよいよ端緒を開いた。翌安政元年一月には、早くも水戸藩によつて、三帆橋、長さ二十三間一尺、幅五間、深さ四間の大船起工式が江戸の石川島造船所で舉げられた。この船は同三年竣成、旭日丸と命名されたが成績おもしろくなく、厄介丸の異名があつたと云はれるが、それにしても斯く迅速に着工し得たのは、齊昭が天保年間から絶えず造船の事に留意しつづつた結果である。

安政元年五月、幕府は卒先して浦賀港で三櫓の帆船鳳凰丸を造つた。これは外型を西洋型に摸した船であつて、龍骨も肋骨もなく、要部の構造は和船と異ならなかつた。

同年十一月、露國使節ブチャーチンの乗艦フレガット・ダイヤモンド號が、海嘯の

ため下田灣附近に沈没した。そこで幕府に請ひ、伊豆國君澤郡戸田村で代艦を造つた。わが船大工が親しく西洋型船舶の造船術を正式に會得したのは、この時を以つて始めとする。

そこで幕府は、わが船大工に命じて更に同型（スクーナー型）帆船六隻を戸田村で、四隻を石川島造船所で建造させ、ダイヤモンド號建造の地、君澤郡にちなんで君澤形と稱した。爾來、わが造船術は面目を一新した。

安政二年（二五一五）六月、オランダ國は汽船一隻を幕府に贈つて好意を表した。これは觀光丸と命名されたが、わが國における洋式軍艦の嚆矢である。

當時、わが國では汽船の建造はまだ難しかつたので、幕府はオランダに軍艦を注文した。安政四年に來着した威臨丸と朝陽丸がそれである。同年、イギリスからも軍艦一隻を贈つて來たが、これは蟠龍丸と命名した。同年は更に長崎で、わが國最初の汽船を造つた。長さ十五間、幅三間、瓊浦形と稱した。ここに我が海軍の陣容は漸く整ひ始めた。

安政五年（二五一八）六月、遂に勅許を得ずして、幕府は日米通商假條約に調印し、次いで諸外國とも、ほぼ同様の條約を結んだ。

文久二年（二五二二）五月、石川島造船所で軍艦一隻が試造された。長さ十七間二尺、幅二間三尺、排水噸數百三十八噸、六十馬力、速度五節、備砲三门。途中で機關部主任肥田濱五郎のオランダ派遣のため、全工程を終つたのは慶應二年十二月で四年有餘を費した。これは我が國建造の最初の木造軍艦で、千代田形と命名した。

これより先、幕府はオランダに軍艦を注文し、また澤太郎左衛門、榎本武揚、赤松則良、内田恒次郎等を留學生として同國に派遣してあつた。竣成した軍艦は開陽丸と命名、慶應三年五月、横濱に廻航し、歸朝後江川太郎左衛門は同艦の副長となつた。

この間、横須賀造船所の工は着々と進捗し、石川島造船所は現状維持のままに遺され、明治維新を迎へたのである。

## 明治維新後

今日見るやうな帝國海軍の發達は、明治維新後の事に屬するが、その發足當時、即ち軍務官所管の全海軍は、軍艦およそ十六隻、運送船およそ二十七隻であつた。日本近世造船史に據つて、その艦船名を擧げてみる。

軍務官直轄艦船 和泉・河内・攝津・甲鐵（後東艦）・富士山・觀光・千代田形（以上軍艦）。咸臨・長鯨・鳳凰・立象・開運・飛隼・飛龍・快風（以上運輸船）。

軍務官所管諸藩艦船 佐賀藩—電流・延年・皐月。鹿兒島藩—春日・乾行。山口藩—第一丁卯・第二丁卯。熊本藩—萬里。秋田藩—陽昔（以上軍艦）。山口藩—華陽・丙寅。廣島藩—豐安・達觀。鹿兒島藩—豐瑞。熊本藩—凌雲。久留米藩—千歲。嚴原藩—祥瑞。犬山藩—速島・神護。徳島藩—戊辰。和歌山藩—「ニドール」。福岡藩—大鵬・環瀛。龍野藩—神龍。福山藩—順風。金澤藩—錫懷。高知藩—夕

顔。大洲藩—洪福(以上運輸船)。

左の艦船の大半は汽船で帆船は少く、船質は木或は鐵である。  
軍務官新設は明治元年閏四月。軍務官を廢して兵部省を新設したのは翌二年七月のことであつた。

なほ、丸山國雄氏は「明治初年に於ける我が海軍」の稿中、明治五年當時の我が艦船十八隻(總噸數約一萬三千五百噸)を左の通りに、表記されてゐる。

艦名	噸數	馬力	裝砲	艦質
東	一、三八七	七〇〇	六	鐵
龍	二、五七〇	九七五	七	鐵
筑波	一、九五〇	八ノット	二〇	木
富士	一、〇〇〇	三五〇	二四	木
春日	一、二六九	三〇〇	六	木
日進	一、四七〇	七一〇	七	木

艦名	噸數	馬力	裝砲	艦質
雲揚	二九五	一〇六	三	木
第一十	二五〇	六〇	六	木
第二十	二五〇	六〇	六	木
鳳翔	三三〇	二二三	二	木
孟春	三五七	一九一		鐵骨木皮
乾行	五二三	一二〇		木
攝津	九三五		八	木
千代田	一四〇	六〇		木
快風	一五五			木
天城	五二六	七二〇	五	木

(他ニ大阪、春風ノ二船アリ而シテ本表中空白ノ所ハ後日ノ調査ニ俟ツ)

兵部省を廢して、陸軍海軍の兩省を置かれたのは明治五年二月のことであつた。  
今、明治初年に於ける海軍創設當時の状況を偲び感慨深いものがある。



## 其の後の發展

横須賀と長崎の兩製鐵所を造船所と改稱したのは明治四年（二五三一）四月のことであつた。この年十一月には、長くも 明治天皇横須賀造船所に臨幸、始めて造船の事を叙覽あらせられたのである。

明治政府になつてからは、わが造船技術は益々進歩したから、從來の大和形船は漸く廢れて、西洋式の船がこれに代る傾向となつた。

明治四年、佐渡で建造した新瀉丸は、長さ八十二尺、幅十七尺、深さ六尺、六十四噸、公稱十馬力で、わが國最初の鐵製商船であるが、外國の設計であつたから、眞の意味での我が國建造の鐵船は翌五年に、大阪で建造した興讚丸を以つてしなければなるまい。その後にも新造鐵船はあつたが何れも五百噸以下で、その數も二十餘隻で止まり、明治二十年以後は鋼船時代に移つた。

明治二十六年以前、商船で最も大なるものは、明治十六年（二五四三）、長崎で竣成した木造汽船小菅丸で千四百九十六噸であつた。

明治十八年（二五四五）、政府は明治二十一年以後は大和形五百石積以上の船舶建造禁止令を發布した。その結果は和洋折衷式木船、所謂「合の子船」が著しく増加したことがあつた。然し造船界の本流は鐵船時代から鋼船時代へと向つて進んでゐた。

明治二十三年、大阪商船會社は卒先して鋼製汽船の筑後川丸を造り、次いで木曾川丸、多摩川丸、富士川丸を造り、翌年信濃丸を造つた。

明治二十八年には、日本郵船會社は須摩丸を造り、續いて宮島丸、立神丸を造り、明治三十一年には有名な常陸丸が竣成した。總噸數六千百七十二噸。わが造船史上の劃期的巨船であつた。

このやうにして、明治二十七・八年の日清戦役以後の造船界は大いに活況を呈し、明治三十七・八年の日露戦役を経て驚くべき長足の進歩を遂げ、大正時代か

ら昭和時代へ入つて、艦船建造上の技術と能力は、世界に冠たる地位に立つに到つたのである。

附録 日本造船史話 (終り)

赤帽技師

昭和十八年三月十日印刷  
昭和十八年三月十八日發行 三、〇〇〇部

出文協承証あ  
360228 號  
印檢者著



著者 大平喜間多  
略歴 元信濃日日新聞記者  
(記者生活二十年)

著書に佐久間象山逸話集、  
恩田木工等あり。

定價一圓六十錢

發行者 櫻井子之助  
東京市小石川區水道端一ノ四四

印刷者 谷本正  
東京市芝區愛宕町二ノ二四

印刷所 愛宕印刷株式會社  
(東京二五)

東京市小石川區水道端一

發行所 創造社

(文協會員番 振替東京七三六八番  
號 二五〇三) 電話小石川二六六八番

配給元 日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二ノ九

964
6

終



創 造 社